

MIZU

KAMI

SITE

水上遺跡

第2次発掘調査報告書



1981

山形県教育委員会

みず かみ
水 上 遺 跡

第 2 次 発 掘 調 査 報 告 書

昭 和 56 年 3 月

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和55年度に実施した県立新庄北高等学校向町分校・校舎建設にかかる「第2次・水上遺跡」の発掘調査結果をまとめたものであります。

自然の豊富な最上町には、小国川流域を中心に数多くの遺跡が発見されており、本遺跡もその一つであります。調査の結果、縄文時代前期・後期の住居跡をはじめ晩期にいたる土器や石器などが発掘され、力強く、創造性豊かな縄文人の生活の跡を伺い知ることができました。

近年埋蔵文化財と開発事業とのかかわりは増加の傾向にあります。県民福祉の向上を目的とする諸開発事業と、県民ひいては国民の遺産である埋蔵文化財の保護行政との間には、数多くの問題が山積しております。この両者の調整を行ない埋蔵文化財の保護をはかることは重要な課題であり、県教育委員会においては一層の努力を重ねてきているところであります。

このような意味において、本書が埋蔵文化財に対する理解を深め、その保護普及の一助になれば幸いと存じます。

終わりに、調査にあたって適切な御指導と多大なる御協力をいただいた関係各位に心から感謝申し上げるものであります。

昭和56年3月

山形県教育委員会

教育長 大竹正治

例　　言

- 1 本報告書は、山形県立新庄北高等学校向町分校・校舎建設工事にかかる水上遺跡緊急発掘調査報告書である。調査は、山形県教育委員会が主体となり、昭和55年4月14日～同年6月20日の延40日間にわたって実施された。
- 2 本遺における緊急発掘調査は、過去に1度実施され（昭和51年7月20日～同年9月8日、延36日間）ており、便宜上それを第1次調査、今回のを第2次調査と区分する。
- 3 調査にあたっては、山形県土木部宮繕課・最上町教育委員会・県立新庄北高等学校向町分校などの諸関係機関の協力を得た。ここに記して感謝を申し上げる。
- 4 調査体制は、下記の通りである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 佐々木洋治（主任調査員）　名和達朗（現場主任）　阿部明彦（調査員）
中嶋 寛（調査員） [山形県教育庁文化課]

調査協力 最上町教育委員会

- 5 挿図縮尺は、遺構については40分の1・60分の1・遺物については2分の1・3分の1、を基本とし、それぞれにスケールを示した。挿図中及び文中の記号は、S T—住居跡・E L—炉跡・E P—柱穴・S K—土壤・S X—性格不明遺構・R P—土器・R Q—石器とし、それぞれ一連番号を付け、柱穴などは各挿図毎に一連の番号で示した。
- 6 本報告書の作成は、名和達朗・阿部明彦が中心に執筆し、挿図・図版作成については津留房子・高橋貴恵子・黒金佳子・枝松美保子・山口由紀子・池田洋子・佐藤隆子、土器復元については太田八重子・鏡 克子・奥山厚子がこれを補助した。
本書の編集は、名和達朗が担当し、全体については、佐々木洋治が総括した。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	1
II 遺跡の概要	
1 立地と環境	5
2 遺跡の層序	6
3 遺構・遺物の分布	7
III 遺構	
1 住居跡	9
2 土 壤	17
IV 遺 物	
1 土 器	22
2 完形土器	32
3 土製品	40
4 石 器	42
V まとめ	49

挿図目次

第1図 水上遺跡位置図	2	第12図 土器拓影図（3）	27
第2図 遺跡全体図	4	第13図 土器拓影図（4）	29
第3図 土層図	6	第14図 土器拓影図（5）	30
第4図 遺構配置図	7	第15図 土器拓影図（6）	31
第5図 2 a～d号住居跡	10	第16図 土器実測図（1）	33
第6図 6 a・b号住居跡	13	第17図 土器実測図（2）	34
第7図 6 c～e号住居跡	14	第18図 R P53・54・59埋設土器 土層図	35
第8図 3・5・9・14号土壤	18		
第9図 22号ビット・4・12・13・15・		第19図 土偶・滑車形耳飾・円盤形	

19~21号土壤	20	石製品	41
第10図 土器拓影図（1）	23	第20図 石器分類図（1）	43
第11図 土器拓影図（2）	25	第21図 石器分類図（2）	44

図版目次

表 紙 水上遺跡調査状（南側より望む）		図版 9 9・13・19~22号土壤	
図版 1 水上遺跡遠景 調査前状況	3	土層断面	21
図版 2 遺跡近景	5	図版10 R P53・54・59土層断面	35
図版 3 土層断面	6	図版11 完形土器	36
図版 4 遺構全影	8	図版12 1・2類土器 3~5類土器	37
図版 5 2a~d号住居跡全景（1）		図版13 6~8類土器 8~10類土器	38
2a~d号住居跡全景（2）	11	図版14 11~15類土器 16~19類土器	39
図版 6 6a~d号住居跡全景		図版15 土偶 滑車形耳飾 円盤形	
6c~e号住居跡全景	15	土製品	40
図版 7 6a号住居跡炉跡・R P73		図版16 石鎌 石鋸石匙 撥・削器	45
埋設土器 同・土層断面	16	図版17 磨製石斧 石錐 凹石	
図版 8 3・4a・4b・5号土壤		円盤形石製品	46
土層断面	17	図版18 石皿 磨石	47
付表-1 石器組成と出土数			42
付表-2 石器分類基準表			48

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

水上遺跡は、山形県最上郡最上町向町字水上に所在する。最上町管内には、数多くの遺跡があり、「山形県遺跡地図」(昭和53年・山形県教育委員会編)によれば41ヶ所の遺跡が明記されており、本遺跡も913の番号で記載されている。

本遺跡における調査は、過去に一度実施されており、便宜上それを第1次調査、今回のを第2次調査と区分する。

第1次調査は、昭和51年度に県立新庄北高等学校向町分校（当時、新庄農業高第学校向町分校）グランド造成工事にかかる緊急発掘調査として、県教育委員会が主体となり、昭和51年7月20日～9月8日の期間実施され、縄文中期の住居跡1棟、後期の住居跡5棟及び土壙3基他、中期～晚期の遺物多数が発見された。

第2次調査は、昭和55年度に同校の新校舎建設工事が実施されることになり、埋蔵文化財緊急発掘調査による記録保存の必要から、県教委・学校側関係者・最上町教委など関係機関による協議が行なわれ、これに基づいて県教委が主体となり昭和55年4月14日から調査を実施するはこびとなつた次第である。

2 調査の経過（第2図）

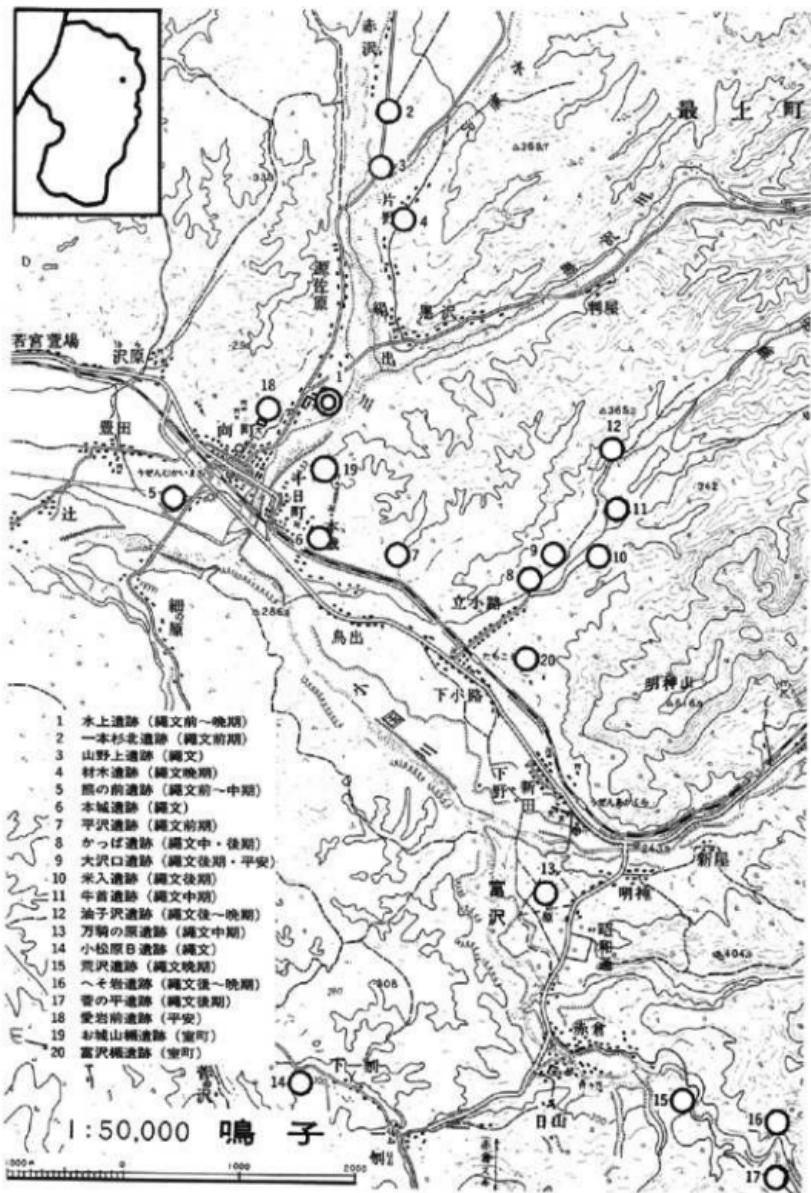
今回の調査区は、遺跡範囲の北東側に位置し、東西150m・南北180mの範囲を測る。まず遺跡全体に 2×2 mを一単位とするグリットを設定し、南北X軸・東西Y軸と決定した。グリット方向は、第1次調査区の方向に一致させた。

つぎに10m間隔で 2×2 mの坪掘りを行ない、さらにこれにトレンチ法を並用して遺跡の詳細な範囲及び遺構・遺物の集中か所を追求した。その結果、調査区の北東側の段丘縁辺部付近に多量の遺物が検出され、同地区を精査区域とした。

精査区は、 10×10 mの大調査区を10ヶ所設け、重機使用による表土の粗掘りを行ない、各調査区境界には、幅1mの壁を設けセクション観察用とした。

粗掘り後、面精査を実施し、J～N-25Gにかけて多量の礫及び遺物を検出し、さらに住居跡及び土壙多数を把握した。

調査期間後半からは、それら各遺構のプラン・覆土精査と記録作業を並行して行ない、徐々に記録中心の作業に変えていった。最終的には、調査区全体の写真撮影・実測・レベルを記録し、調査の全日程を終了した。

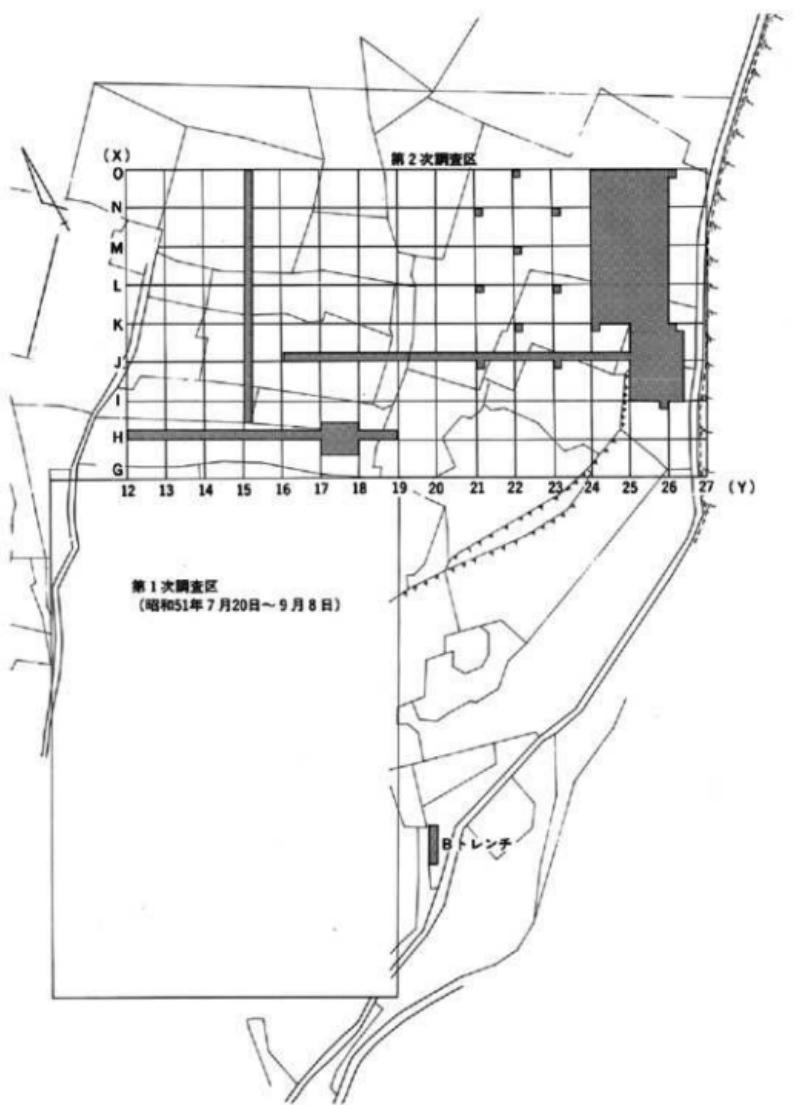


第1図 水上遺跡 位置図



水上遺跡遠景





第2図 遺跡全体図

II 遺跡の概観

1 立地と環境（第1図 図版1・3）

向町盆地は、周囲を奥羽山系の山々がめぐり、東西約7.5km・南北約5kmを測る山間盆地である。地区中央部は、神室連峰を源とする最上小国川が西流し、白川・綱出川などの各支流河川が、これに注ぎ込んでいる。そのため、各河川沿いには段丘が形成され、多くの遺跡が分布することが確認されている。時期的には、旧石器～歴史時代の各時期にわたってみとめられ、特に縄文時代が顕著である。

水上遺跡は、綱出川右岸の段丘上段及び中段に立地し、清水沢川と黒沢川が合流して綱出川となる合流点下流500mの地点で、標高225m～226mを測る。遺跡全体は、南側にゆるい傾斜を示し、その南西側で現在グランドになっている場所が第1次調査区、北東側から南側にかけての一帯が今回の第2次調査区である。地目は、大部分が畠地で他に北側が水田、南側の一部が荒地となっている。



図版2

水上遺跡近景（綱出川左岸から望む）

2 遺跡の層序 (第3図 図版4)

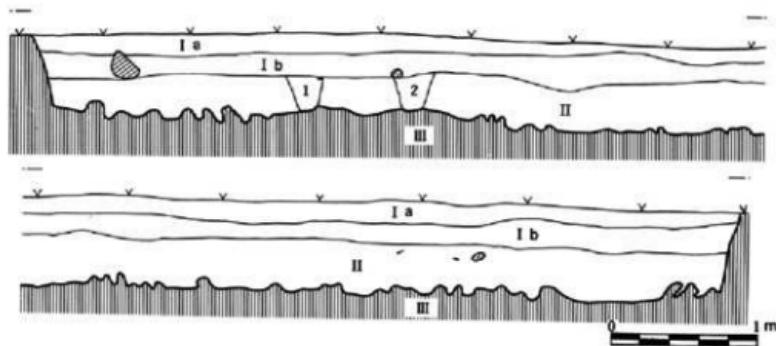
今回の調査区域は、ほとんどが段丘上段部に入る。土層の堆積状態は調査区北側からゆるい傾斜を示し、J-25G付近から少し急傾斜となる。そのため土層もほぼ水平の堆積から傾斜変換に伴って厚く堆積する状況を呈する。

I a層 耕作土

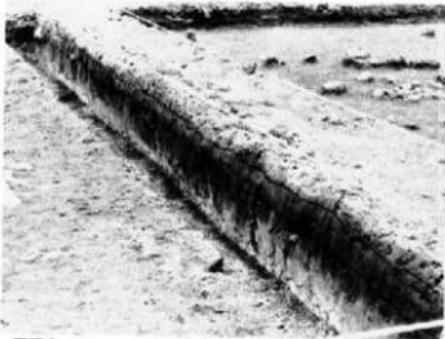
I b層 暗褐色土 均質な層であるが、植物根が多量に混入し、所々に径約20cm大の礫を含む。

II 層 ハ 上部から下部にかけて漸移的に明るい色調を示す。炭化物・III層粒子を含み、比較的柔かであるが下部にかけて徐々にしまってくる。上部に遺物を含包し、また所々に径10~20cm大の礫を含む。

III 層 黄褐色土 ローム質の地山である。II層との境界は、かなり凹凸を呈する。構造確認面である。



第3図 土層図



図版3

土層断面

3 遺構・遺物の分布 (第4図 図版5)

調査初期の坪掘り段階で、調査区域の北東側に遺物がまとまる傾向を示し、またトレンチのH-17Gにおいて遺構と思われる土色変化を把握したため、その二ヶ所を精査地区として調査を進めた結果、遺構・遺物のほとんどが前者の地区に集中することが確認された。

遺構では、住居跡12軒(検出9・確認2・炉跡のみ1)・土壙32基(埋設土器3基)・ピット24本・性格不明遺構11基である。

これら遺構は、II層を掘り上げ、III層面の精査をつづける途中に確認され、全体にI～N-25Gに分布する。

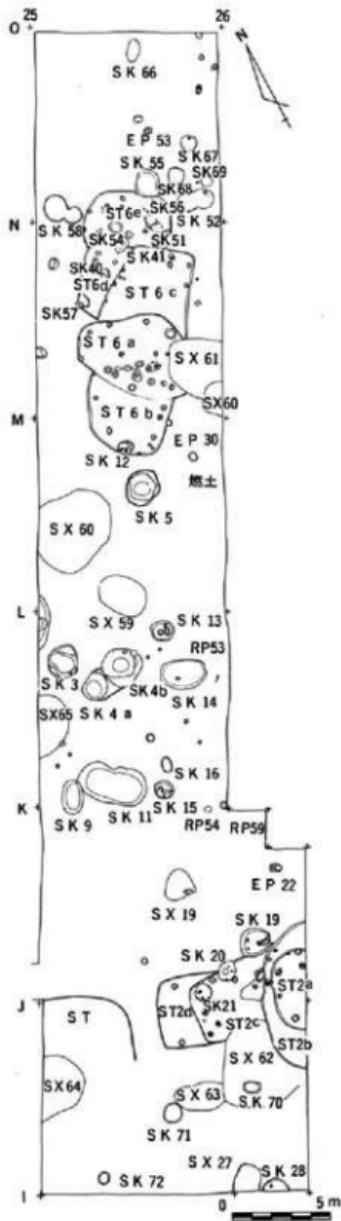
住居跡は、主にM・N-25G及びI・J-25・26Gにまとまり、土壙・ピットは、これとほぼ同一な分布形態であるが、K・L-25Gまで広がりを示す。SX遺構は、M-25Gから南側にかけてみとめられ、一部住居跡と重複する。

遺物は、縄文時代前期・中期・後期・晩期に分けられ、総数70箱(土器60箱・石器10箱)である。

時期別に出土する場所が片寄り、前期はI-25G、中期はH・G-17G、中・後期はI～N-25G、晩期は調査区南側Bトレンチに分けられる。全体を通じて後期初頭が、量的に一番多く、ST6を検出したM・N-25G付近に集中し、さらに各土壙覆土内からも出土がみられる。

一般に出土遺物は、幅10mの調査区内に分布範囲が限定され、長さも段丘縁辺部の25列のように50～60mの範囲を示す。1次調査の場合も、3カ所の時期的に異なるまとまりが確認されている。

以上から本遺跡は、一部重複しながらも時期別に地点が分けられる前期～晩期の集落跡といえる。



第4図 遺構配置図



図版 4

遺構全景（北側から望む）

III 遺構

1 住居跡

2 a～d号住居跡（第5図 図版6・7）

精査区の南東側の傾斜変換線付近に位置し、一部調査区外の段丘崖面に入り侵食されて不明である。ST 2 c・dをIII層面において精査中、その東側の範囲を把握するため26列を拡張したところ、それを切って新たにST 2 bが確認された。さらに、このプランの広がりを追求した段階でST 2 aが確認され、当初ST 2 bより古い住居跡と考えられたが、セクション観察の結果ST 2 aの立上りが、ST 2 bを切っていることが判明し、新旧が逆転することが明らかになった。一方ST 2 dは、ST 2 cのプラン精査中にその西側に検出された。最終的な新旧関係は、ST 2 a→ST 2 b→ST 2 c→ST 2 dの順である。

2 a号住居跡 東側半分は、段丘崖面で侵食され全体は不明であるが、平面形は円形ないし橢円形と推定される。直徑約4m、III層を約20cm掘り込んで形成し、床面は少し起伏を呈するが、ほぼ平坦で南側に若干傾斜する。周溝は、みとめられない。柱穴は、9本検出され、径約15～30cm・深さ30cm前後を測る。

出土遺物は、覆土1層からR P58、2層から床面にかけて土器片多数・石鐵1点出土している。時期は、縄文後期宮戸I b式に併行する。

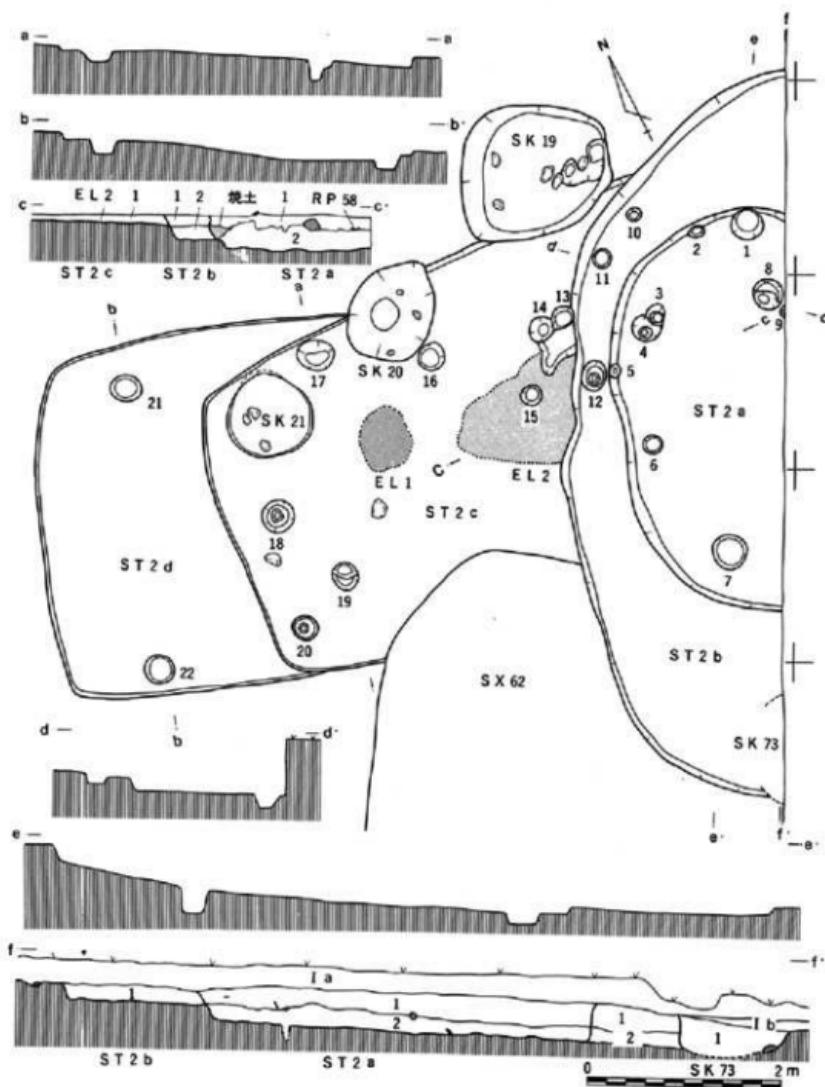
2 b号住居跡 ST 2 aよりひと回り大きく直徑7.40m、深さ20cmを測る。東側半分を欠くが、平面形は橢円形と推定される。床面は南側に傾斜し、北側で勾配がやや急である。壁面は斜めに掘り込まれ、周溝はみとめられない。プランの南側は、SK73によって切られている。柱穴は、3本検出され支柱穴と考えられる。直徑30cm・深さ約20cm内外である。

出土遺物は、R P55・56一括土器・石鐵1点が覆土1層から出土、宮戸I b式に併行する。

2 c号住居跡 平面形は、方形を示すと考えられ、長軸5m・短軸4mを推定する。床面は若干南側に傾斜するが、ほぼ平坦である。壁面は斜位にIII層を掘り込み、10～20cmを測る。床面中央及びやや東寄りに地床炉を伴なう。EL 1は、本住居床面精査中に検出され、若干深い位置にあることから、ST 2 dに伴なうものと思われる。柱穴は、EP 18・20で直徑30cm・深さ20cm内外である。

出土遺物は、床面より大木6式併行の深鉢土器片が出土している。

2 d号住居跡 一番西端に位置し、平面形は方形を呈する。推定長軸5m・短軸3.90m、床面は少し南側でくぼみを呈す。確認壁高は約10cmで、柱穴はEP 21・22が確認され、直徑30cm・深さ15cm内外である。



(ST 2 a 土壌)

1 黒色土—粒子の細い砂質土で、遺物・炭化粒子を少量に含む。

2 増灰褐色土—やや粘質で、遺物・炭化粒子を含む。

(TS 2 b 土壌)

1 増灰褐色土—やや粘質で、若干の遺物・炭化物を含む。

2 增褐色砂質土—均質で、若干の炭化物を含むが遺物の混入はない。

(ST 2 c 土壌)

1 増褐色砂質土—均質で、遺物・炭化物を含む。
(SK 73 土壌)

1 黒色土—砂質土で、遺物・炭化物を少量含む。

第5図 2 a ~ d号住居跡



2a～d号住居跡全景（1）



2a～d号住居跡全景（2）

6 a～e号住居跡（第6・7図 図版8～10）

精査区北側の平坦面に位置する。同地区は、II層より疊群が多量に出土し、その掘り上げと並行してIII層面の精査を行なった際、不整形な土色変化がみとめられ住居跡と想定された。プラン精査を進めた結果、5棟の重複が確認され、覆土の切合からST6a→ST6b、ST6a→ST6c→ST6d→ST6eの新旧関係を示す。

6 a号住居跡 不整楕円形の平面形を示し、東側はSX61によって切られている。長径6m・短径4m、III層を約10cm掘り込んでいる。床面は、ゆるい起伏をもつ。柱穴は、EP1～5・11・14・17で壁際をめぐる。直径20～30cm・深さ20cm内外である。楕円形に掘り込まれたEL1炉跡が、床面南西側に伴う。同炉跡の南側には扁平な礫が直立し、内側にRP73埋設土器を伴う。時期は、宮戸Ib式併行と考えられる。

遺物は、上記土器の他、覆土1・2層より土器片多数、搔器1点を出土する。

6 b号住居跡 ST6a西側に位置する。平面形は、不整楕円形を呈し、推定長径5m・短径4.5mを測る。床面は、中央がややくぼみ、柱穴は、EP9・10・16・18～26で、直径20～30cm・深さ20cm内外である。壁面はIII層を15cm程、斜位に掘り込み、その西側をSK12が切っている。

遺物は、覆土から床面にかけて宮戸Ib式併行の土器片及び石鎌3点を出土する。

6 c号住居跡 ST6a北側に位置し、平面形は不整方形を呈する。長軸4.70m・短軸4m、壁高約10cmを測る。床面は、中央付近より東側へ若干傾斜する。柱穴は、EP1～9で、1～4は直径20～30cm・深さ約10cm、西壁際の5～9は直径10cm・深さ10cm内外と小さく、壁柱穴と考えられる。またEP1は、覆土に疊を含み内部が焼けている。

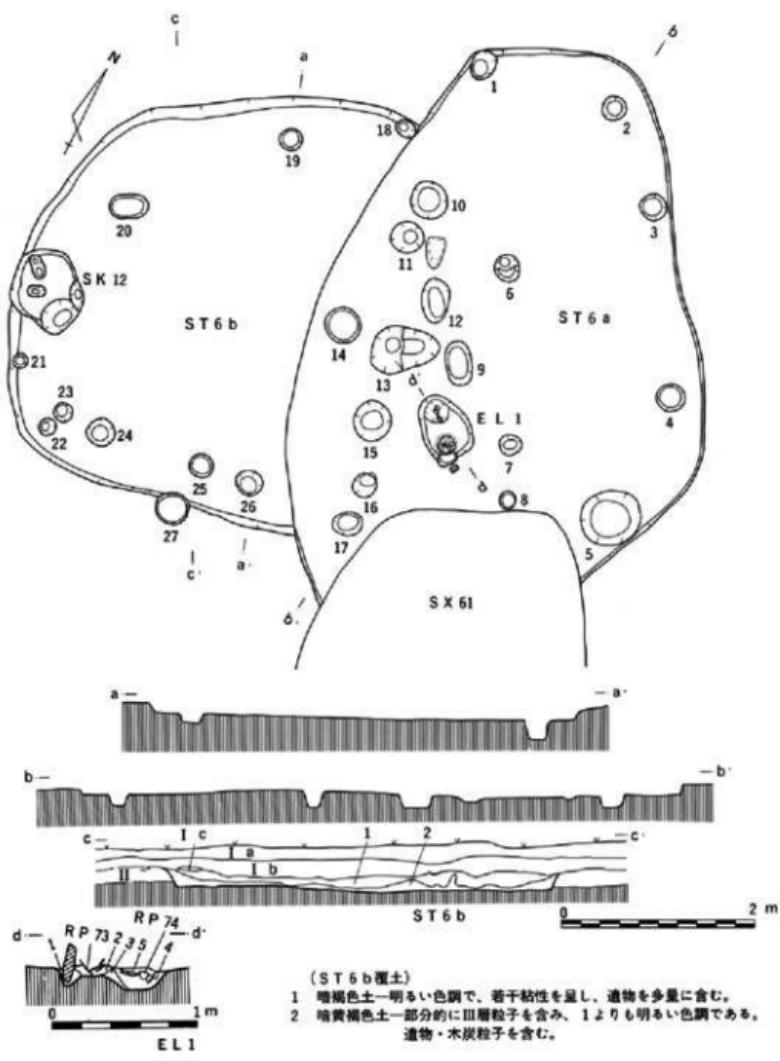
遺物は、覆土内より土器少量、石鎌・磨製石斧・甌状石器各1点出土。

6 d号住居跡 平面形は、不整方形と思われる。東側半分をST6cに切られている。推定長軸・短軸4m、壁高は約10cm、床面はほぼ平坦でST6cより若干高い。炉跡は、未検出である。柱穴は、EP10～13で直径30cm・深さ20cm内外である。

遺物は、EP12・13覆土から宮戸Ib式併行の土器片が若干出土している他、住居覆土内からは、石鎌が1点出土している。

6 e号住居跡 南側をST6c・dによって切られ、さらにSK41・51・54～56が切っている。平面形は楕円形を呈し、長径4.60m・短径約3.50mを測る。床面はほぼ平坦で、III層を約20cm程度掘り込んで形成され、炉跡は未検出である。柱穴は、EP14～23で直径15～30cm・深さ10～30cmを測り、15・17・23の主柱穴に16～20の支柱穴及び21～23の壁柱穴が伴うものと考えられる。

遺物は、燃糸地文の土器片若干と石鎌3点・P R47石皿1点が覆土内から出土している。



(EL 1 植土)
1 噴灰黄色シルト—やや粘性があり、炭化物を含む。

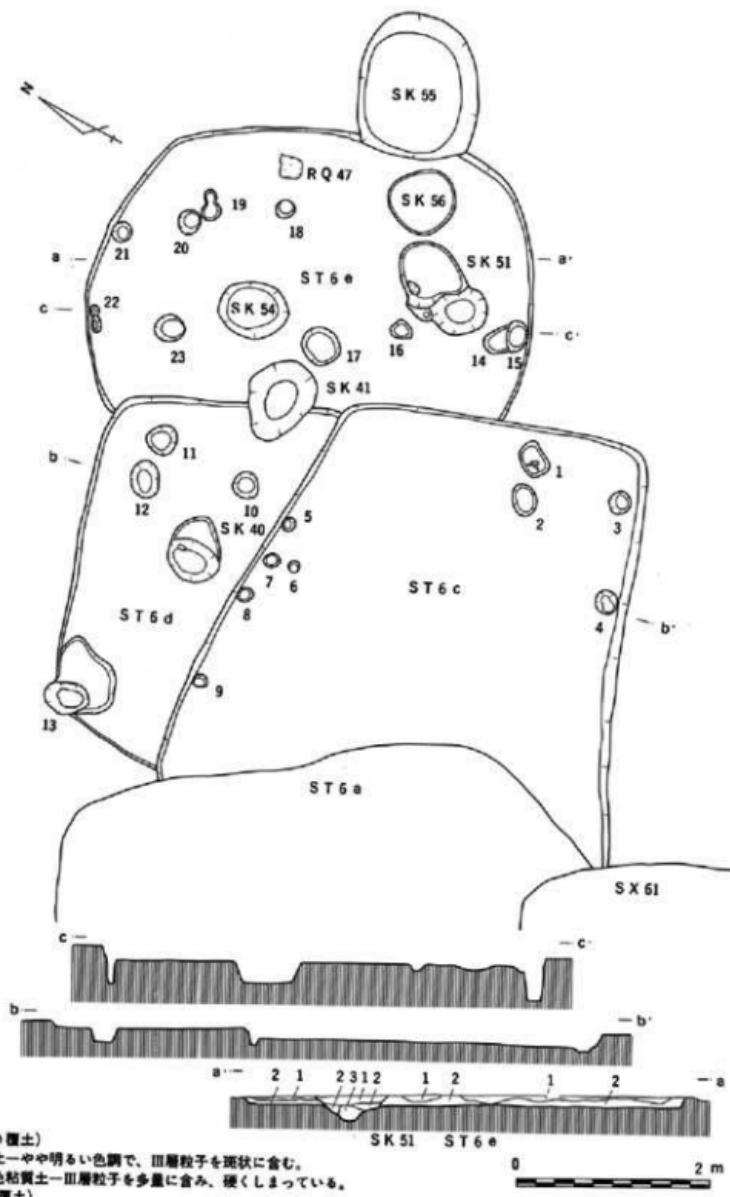
2 焼土。

3 噴黄灰色シルト—若干炭化物を含む。

4 // 烧土・炭化物を含む。

5 噴赤褐色土—バサついて柔かい、焼土粒子・多量の炭化物を含む。

第6図 6 a・b号住居跡



第7図 6c~e号住居跡

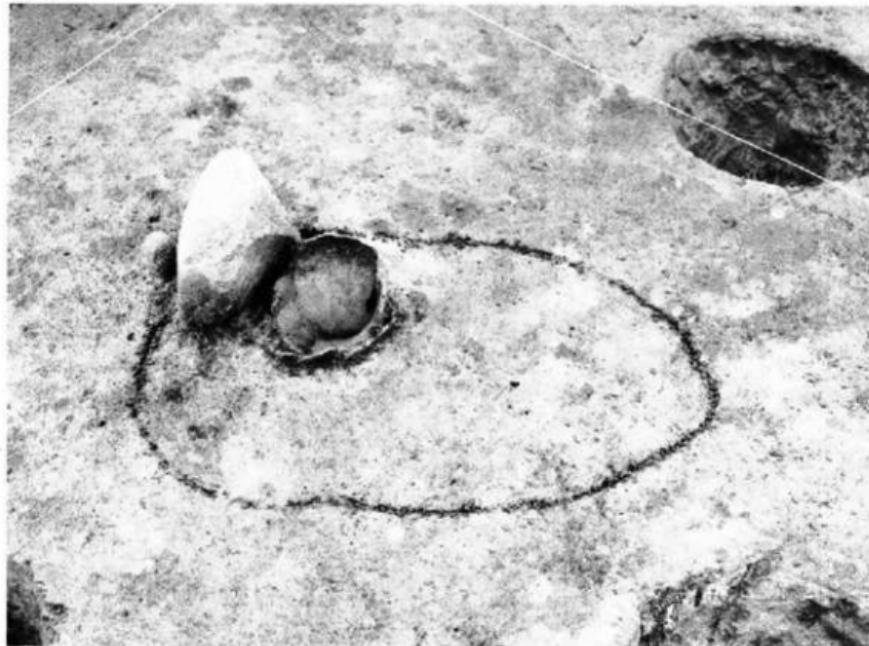
- 1 増褐色土—やや明るい色調で、Ⅲ層粒子を斑状に含む。
 2 浅黃褐色粘質土—Ⅲ層粒子を多量に含み、硬くしまっている。
 (SK 51 褐土)
 3 黑褐色土—山層・木炭粒子を含み、柔かい。
 2 增黃褐色粘質土—Ⅲ層粒子を多量に含み、硬くしまっている。
 3 增褐色土—Ⅲ層・木炭粒子を含み、硬くしまっている。



6 a～d号住居跡全景



6 a～d号住居跡全景



6 a 号住居跡炉跡・R P 73 埋設土器



同・土層断面

2 土 壤

3号土壤 (第8図 図版11)

K-25G北側に位置し、平面形は不整円形を呈し、直径1.80m・深さ20cmを測る。壁面は段をなし、斜位に掘り込んでいる。墳底は中央がやや凹凸を示す。覆土は、3つに分かれ、暗褐色土を主体とする。

遺物は、覆土1層より撚糸地文の深鉢土器片が出土し、宮戸I b式併行と考えられる。

4a・4b号土壤 (第9図 図版11)

S K 3東側に位置し、面精査及びセクション観察の結果、SK 4a→SK 4bの新旧関係が確認された。SK 4aは、直径1.40m・深さ36cmを測り、墳底は若干起伏を呈す。覆土は4つに分かれ、暗褐色土で構成する。一方SK 4bは、直径2m・深さ50cmを測り、墳底は凹凸を呈し、東側へ若干傾斜する。覆土は6つに分けられる。

遺物は、両者とも撚糸地文の沈線文土器を主体とし、時期は文様から宮戸I b式併行と考えられる。

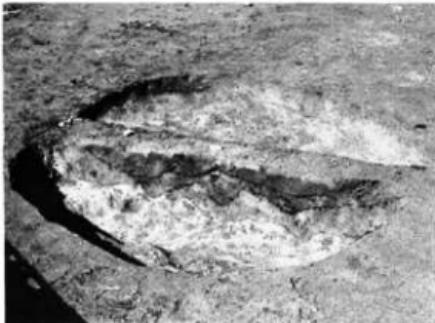
5号土壤 (第8図 図版11)

L-25G中央北寄りに位置し、平面形は不整橿円形を示す。長径2m・短径1.60m・深さ45cmを測る。断面形態は凹凸が激しく、覆土は10層に分けられる。

遺物は、覆土1・2層より出土し、全て土器片である。時期は、宮戸I b式併行と考えられる。

9号土壤 (第8図 図版12)

K-25G北西隅に位置し、SK 11を一部切っている。橿円形を呈し、長径1.76m・短



3号土壤土層断面



4a・b号土壤土層断面



5号土壤土層断面

径1.06m・深さ20cmを測る。壙底は若干起伏をもつが、ほぼ平坦である。覆土は3つに分けられる。

遺物は、覆土1層より斜繩文深鉢土器片が2点出土している。

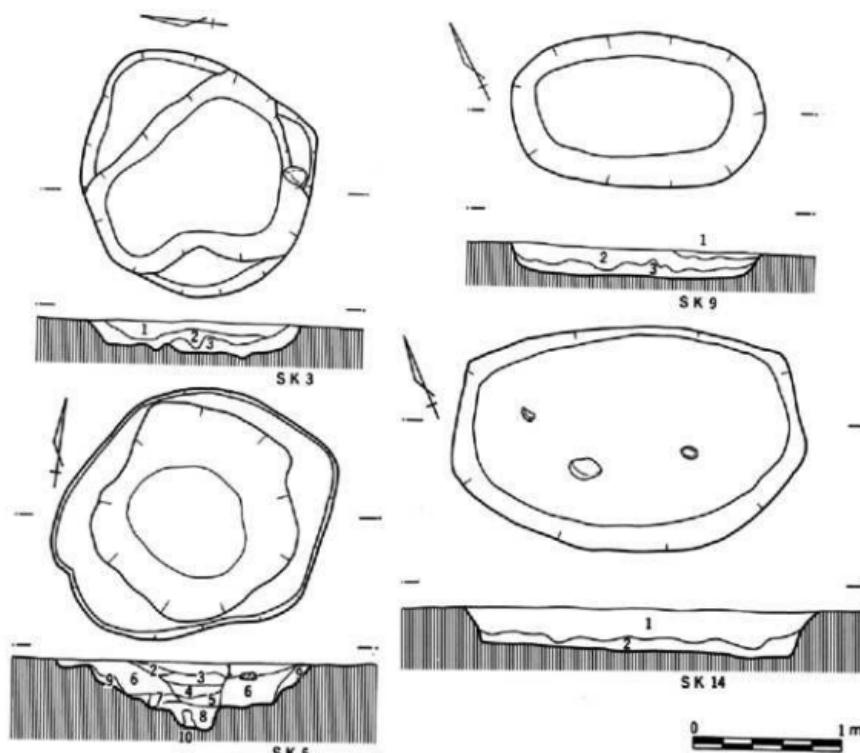
12号土壤 (第9図)

L-25Gに位置し、S T 6 b南端を切っている。不整橢円形を呈し、長径90cm・短径70cm・深さ20cmを測る。壙底は中央部が凹み、ピット4本がみとめられる。覆土は2つに分けられる。

遺物は、覆土1層より宮戸I b式併行の土器片を出土する。

13号土壤 (第9図 図版12)

K-25G北側に位置し、平面形はやや角張った橢円形を呈し、長径1.20m・短径90cm・深さ26cmを測る。壙底は、周囲がやや深く掘り込まれ、中央が高まり、覆土は3分される。



第8図 3・5・9・14号土壤

遺物は、覆土1層より撚糸及び斜繩文の土器及び20~30cm大の河原石が3点出土する。

14号土壙（第8図）

K-25G北東側に位置し、両端が少し角の張る梢円形を呈し、長径2.20m・短径1.52m・深さ30cmを測る。壙底は、若干凹凸があり、東側へ傾斜する。底面には、10~20cm大の河原石を堆積する。覆土は、二つに分けられ、1層に遺物を包含する。

遺物は、宮戸I b式併行の土器片が出土している。

15号土壙（第9図）

S K11東側に位置し、平面形は不整梢円形で、長径1.08m・短径96cm・深さ26cmを測る。壙底は、入組んだ段をなし東側が深く、不整形な平面形を呈する。覆土は3分され、攪乱した堆積状況を示す。

遺物は、覆土1層より宮戸I b式併行の土器片を出土する。

19号土壙（第9図 図版12）

S T 2 c北側を切っている。西側に少しふくらんだ梢円形を呈し、長径1.58m・短径1.40mを測る。壙底はゆるい起伏を示し、東壁寄りに不整形な落ち込みを有する。壁面は、ほぼ垂直に掘り込んでいる。覆土は2分され、1層に土器片・20cm大の河原石を含む。

遺物は、文様からみて宮戸I b式併行と考えられる。

20号土壙（第9図 図版12）

S T 2 c北側中央を切っている。不整梢円形を呈し、長径1.10m・短径86cm深さ36cmを測り、皿状に掘り込んでいる。覆土は、2つに分けられ、10cm大の河原石を3個含む。

遺物は、覆土1層より土器片を若干出土する。時期は、宮戸I b式に併行する。

21号土壙（第9図 図版12）

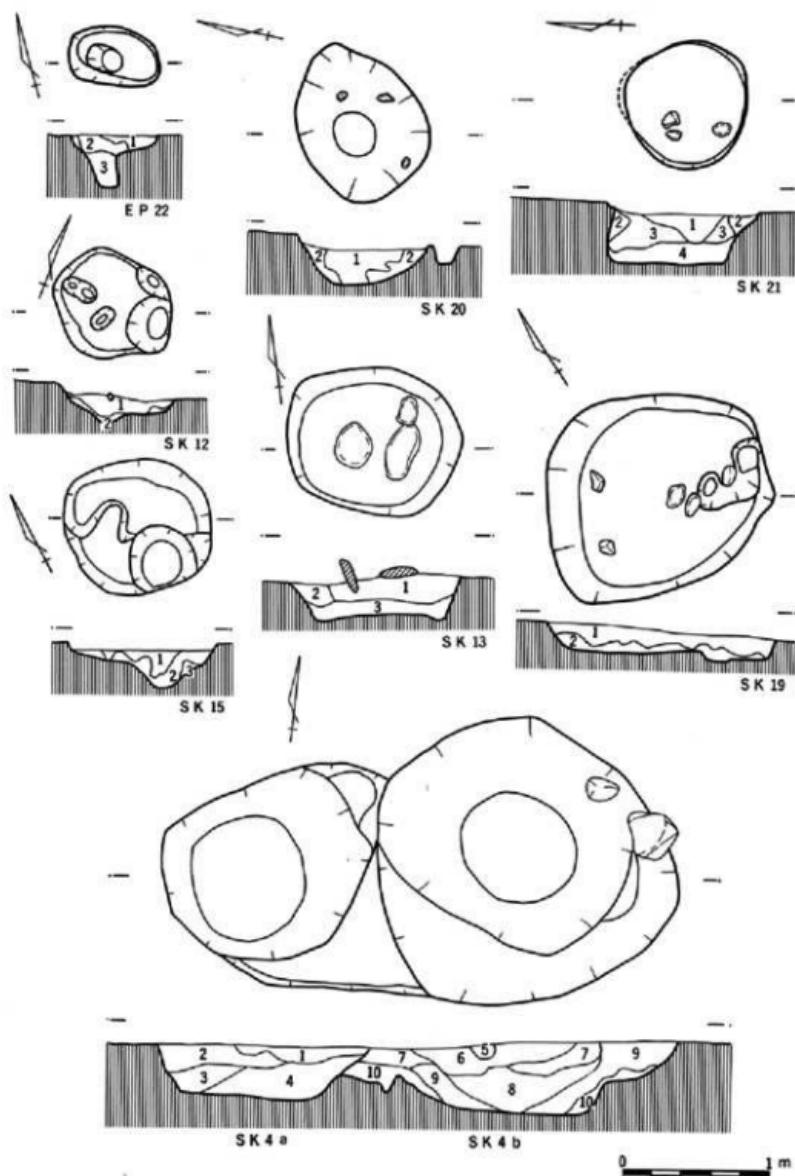
S T 2 c北西隅床面を切っている。円形を呈し、直径80cm・深さ40cmを測る。壁面は、北側が若干袋状に掘り込まれ、他はほぼ垂直に立上る。壙底は、若干起伏をもつが全体にはほぼ平坦である。覆土は4つに分けられ、1層に土器片、3層に10cm大の河原石を含む。

遺物は、土器片が若干出土している。撚糸地文に沈線文を施す文様により、時期は宮戸I b式併行と思われる。

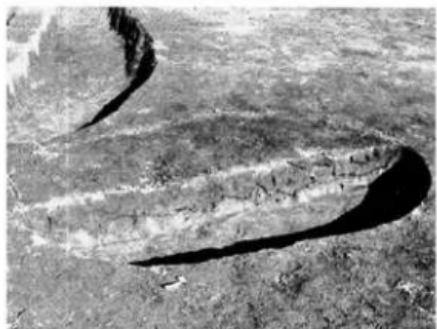
22号ピット（第9図 図版12）

J-26G北東隅に位置する。梢円形の平面形で、長径64cm・短径42cm・深さ36cmを測る。壙底西寄りに直径20cm・深さ22cmの小ピットを有す。同ピットは西に傾斜して掘り込まれ、断面観察から柱穴痕と考えられる。また周囲の掘り込みは、その掘り方と思われる。覆土は、3つに分けられ、全体に西の方からの堆積状況を示す。

遺物は、未検出である。



第9図 22号ピット・4・12・13・15・19・21号土壤



9号土壤土层断面



13号土壤土层断面



19号土壤土层断面



20号土壤土层断面



21号土壤土层断面



22号土壤土层断面

IV 遺 物

1 土 器

本遺跡から出土した土器は、整理箱で60箱を数え、大半が包含層出土である。遺構覆土及び床面等からの出土を確認し得たのは、総数の約10%前後である。

分類については、土器面に描出された文様技法及び文様別に類別を行なった。

1類 (第10図1~4 図版12)

1~3はS T 2 a床面からの出土である。全て口縁破片で、器形は(1)からみて頸部から外反する深鉢である。口縁部に渦巻状の隆線を施し、頸部には刻目を伴う隆線が一条めぐるもの(1)や、口唇部及び口縁部に紐状の隆線を縱あるいは山形状に貼付するもの(2)などがある。さらに數段の半截竹管による山形状の沈線文がめぐらされる(1・3・4)。土器自体は、全般に肉厚で焼成は良好である。

2類 (第10図5~27 図版12)

口縁部が無文を呈し、1ないし2条の隆線をめぐらす土器群。深鉢が大半で、口縁部は山形の橋状突起や波状突起を示し、突起部にはS字状沈線や棒状工具による太い刺突がみられる。体部は纏糸ないし繩文地文の磨消繩文で、渦巻及び直線的なモチーフが描かれる。また、隆線に注目して2つに細別される。

2a類 (5~20) 隆線が鎖状に連続するもの(5~11)や、斜位あるいは縦位の刻目をもつ一群(12~20)。大半が口縁に沿ってめぐらされ、その連結部にはボタン状の浮文を有する(10・14)。小破片のため全体の文様構成は、不明である。

2b類 (21~27) 隆線に刻目を持たない一群。これも全体の文様構成は不明であるが、隆線により口縁無文帯を区画し、体部は2本の沈線による磨消繩文や斜繩文を施し(27)2a類と類似する文様構成を示す。

3類 (第11図1・2 図版12)

口縁部がゆるく外反ないし直立し、山形突起を呈する深鉢である。突起部はやや肥厚し貫通する孔をもつ。突起下にはS字状沈線文を施す。口縁部は無文を示すが、前類の隆線はみとめられず、沈線文を主体とする。体部文様は、破片からみる限りでは突起下にS字文を施し、それを軸に両脇に三角形ないし倒卵形の沈線文を描出するものと考えられる。(1)では、区画外を粗く磨消している。

4類 (第11図3~12 図版12)

口縁部に山形突起をもち、ゆるく外反する深鉢であるが、内彎するもの(11)も一部み



1~3-ST 2a 床面
4-ST 2a 覆土 1層
12·15·16·26-SK 4 b 覆土 1層
22-SK 14 覆土 1層

られる。突起部には、S字文を描き、その裏面には円文ないし渦巻文が描かれる特徴を有す。体部文様は、(8・10)のように前類とほぼ同様である。描出される沈線は、全般に幅が太く、明瞭である。

5類 (第11図13~24 図版12)

沈線文を主体にした土器で、ゆるやかな波状口縁を呈し、比較的薄手に仕上げられている。山形突起はなくなり、波状部にS字文が描かれ、(18・21・22・23)では体部まで連続する。またそれを中心に両側が、三角形状に区画され、燃糸ないし繩文地文の磨消繩文を構成する。地文は、燃糸文が圧倒的に多い。文様構成では、前類に類似するが、沈線が細くなりS字文も簡略化してくる(18~20)傾向を示す。ただし磨消技術は、(21~24)のように地文が残っており、粗雑な感が強い。

6類 (第11図25・26 図版13)

量的に少ないが、波状口縁に一本の平行沈線を施し、体部には両端が渦巻文で連結する沈線(25)や、波状部から垂下するS字文の間を沈線でつなぎ、三角形に区画する(26)特徴を示し、また沈線自体も細い。さらにそれらのモチーフは、磨消しを加えて描出されるが所々に地文が残っており粗い仕上げである。地文は、横位・斜位に走る燃糸文である。

7類 (第11図27 図版13)

1点のみであるが、太い沈線の両端が渦巻を呈し、波状口縁下で対峙する特徴を示す。器形は、ゆるい波状口縁で、口唇部が薄手に仕上げられた深鉢で、直線的に立上る。

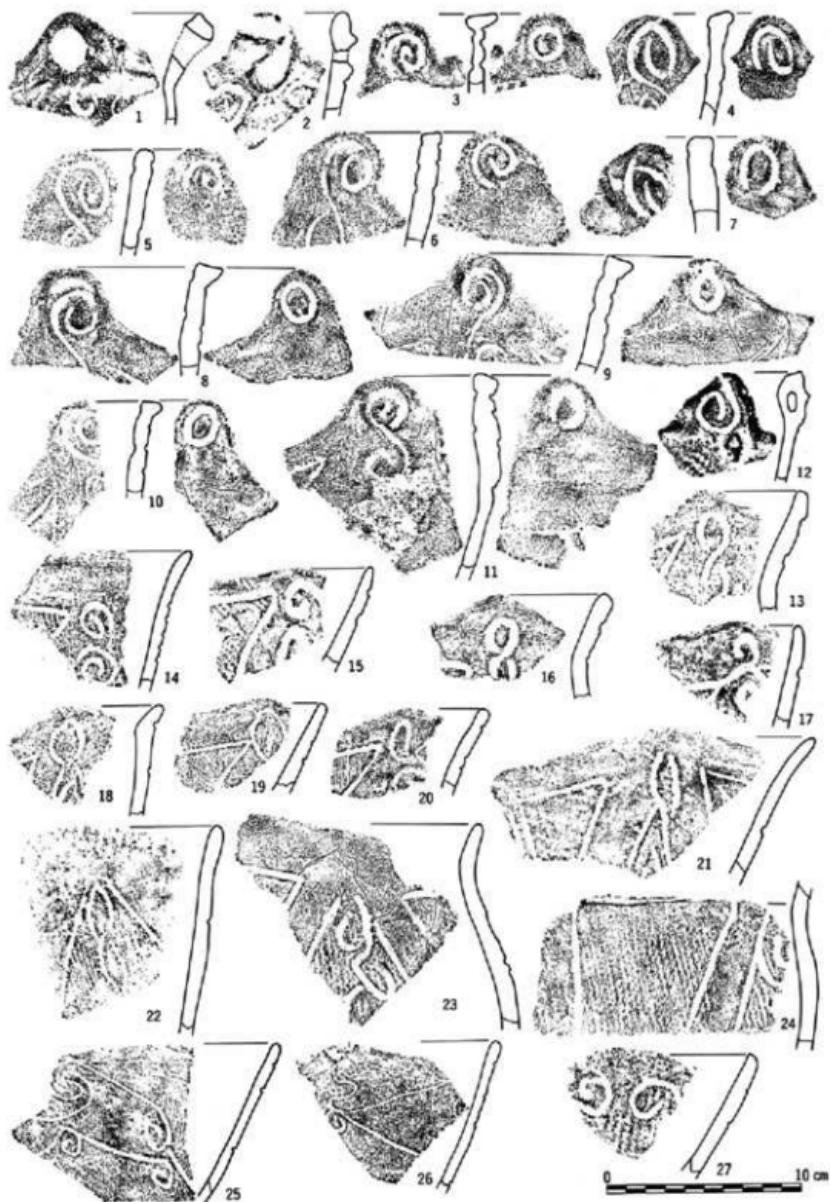
8類 (第12図1~26 図版13)

1本ないし数本の沈線で渦巻・弧線等の曲線文を描出し、沈線間を粗く磨消す土器群、器形は、底部からやや内彎して立上り、頸部からやかに立上る深鉢を主体とする。口縁部は一部波状口縁(8・20)がみとめられるが、概して平縁が多い。さらに本類は、文様別に3つに細別される。

8a類 (1~7・9~19) 燃糸を地文とする磨消繩文で、太く明瞭な沈線文で、渦巻文を主体とする曲線文を描く。(13)は、モチーフの連結部に棒状工具による刺突を伴う、ボタン状の浮文を施す。また(2・9)は、各モチーフ間が一ないし二条の弧線で連結する特徴を示し、(3・4)は、横に連続する弧線及び橢円形のモチーフにより区画しており、さらに細別し得る可能性を示す。

8b類 (20~26) 繩文を地文とする磨消繩文で、モチーフは前類に類似するが、磨消部分が若干せまい特徴を示す。前類に比して出土量は少ない。

8c類 (8) 大きく屈曲する波状口縁を呈し、口唇部は内側に肥厚してやや内彎する小型の深鉢である。文様は、口縁を約1cm幅で磨消し、波状部を中心に太い明瞭な沈線で



22—SK 5 種土層

-25-

第 11 図 土器拓影図 (2)

数条の弧線を左右に描出する。全体に施文方法は 8 a 類に類似するが、器形的特徴により類別した。

9 類 (第13図1~15 図版13)

波状口縁の頂点部に 1 ないし 3 の縦に連続する刺突を施し、これを中心と文様が展開する特徴を示す。体部文様は、5 類に類似するが、細い沈線が多くなる。刺突及び文様により次の 4 つに細別される。

9 a 類 (1~8) 1 ないし 3 の連続する太い刺突を中心に、三角形のモチーフが左右に区画する特徴を示す。ただし (7) は 1 点のみであるが、刺突下部から連続する S 字文が垂下する。沈線は、太く・深く描写される。

9 b 類 (9) 破片で全体は不明であるが、竹管による刺突を縦位に施文する。そのため刺突痕が細く、管状を呈する。

9 c 類 (13) 内側に橋状の突起を形成し、口縁部から縦位に連続する刺突と曲線状の沈線文を描出する。器形は、頸部より外反する深鉢である。

9 d 類 (10~12・14~18) 文様構成は 9 a に類似するが、刺突数が少なくなり大きさも小さくなる (14~15)。また、沈線も細くなり口縁部を一条の沈線で区画し、波状頂点下部からの S 字文も縦長で、両側の沈線も直線的に垂下する (14)。(10~12) は、同一個体で、磨消しによる三角形・倒卵形のモチーフを描く。さらに刺突下部に、沈線両端の渦巻を縦に配置して S 字文を描出する。地文は、節の細い斜繩文 (L R) である。

10 類 (第13図19~22 図版13)

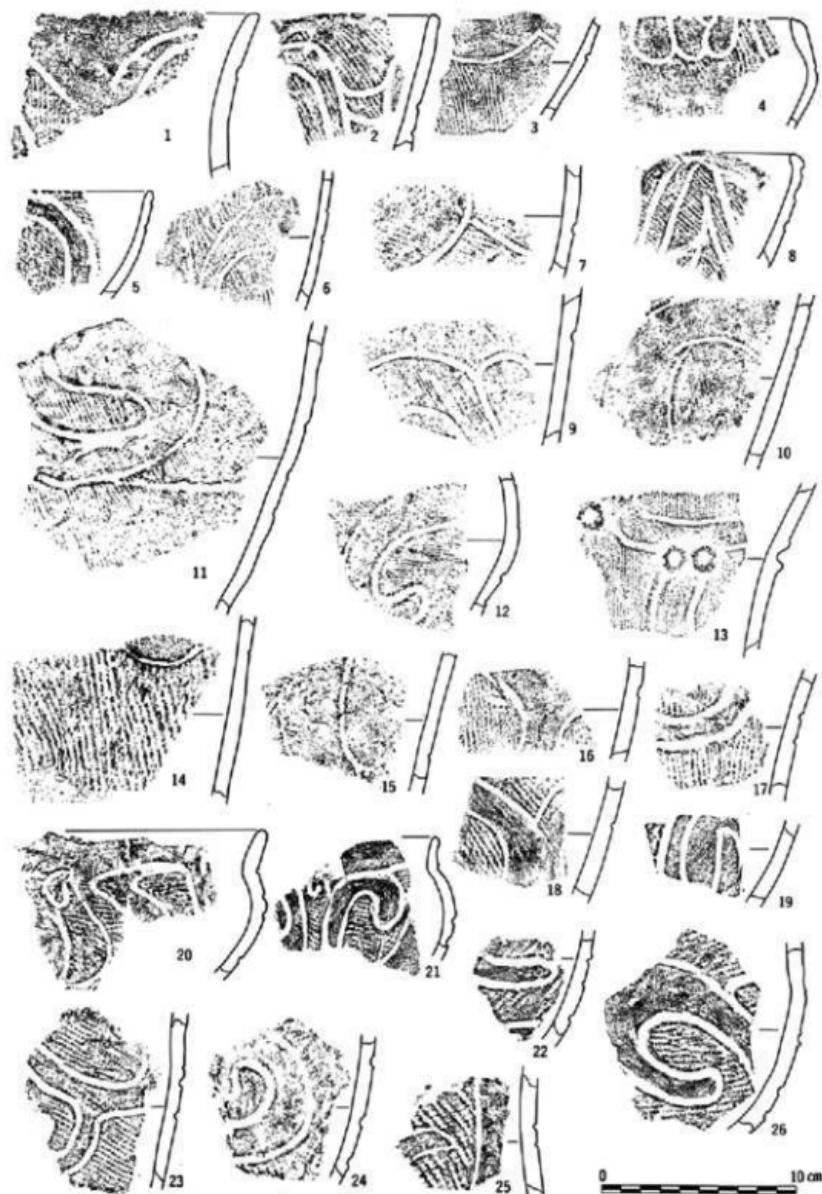
ゆるい波状口縁を呈し、沈線による口縁の区画が行なわれ、沈線下に S 字文を省略化したと思われる円形ないし橢円形の沈線が施される。体部の文様は不明だが、それら円文を中心に弧線ないし曲線文が展開すると考えられる。(19・20) は、同一個体である。

11 類 (第13図23~28 図版14)

口唇部から隆線が垂下し、口縁部をめぐる隆線と連結する土器群。隆線は、鎖状及び斜めに刻目を施すもの (24・26) もみられる。また平行する 2 本の隆線 (23・25) や、口唇部との連結か所に刺突を入れるもの (23・24) 等がある。体部文様は、2 本の沈線により直線ないし曲線文のモチーフを描出する、磨消繩文で構成すると考えられる (24~26~27)。

12 類 (第14図1・2 図版14)

(1・2) は同一個体で、出土数は少ない。低い山形突起を配し、2 条の沈線で口縁を画する。また、波状下部から 2 本の沈線が垂下し、体部文様を縦に区画している。体部は、山形状の沈線で連結する渦巻文を呈し、山形の頂点下には S 字文が垂下すると思われる。さらに各沈線間に、粗い磨消しを加えている。



10・11・14—SK 5 覆土 2 層
15—SK 4 覆土 2 層
20—SK 3 覆土 1 層

13類（第14図3～10・13 図版14）

口縁部よりジグザグに沈線が垂下する土器群。S字文から垂下するもの（6・7）や、蕨手状を呈するもの（3・4）、數本垂下するもの（10）、鋸齒状に垂下するもの（13）等に分けられる。

14類（第14図11・12 図版14）

2片とも同一個体である。ゆるい波状口縁の波状頂点部に、刺突を伴うボタン状浮文を貼付し、その下部に2重の弧線がめぐりさらに体部に沈線が垂下する特徴を示す。口縁部は沈線により、無文帯を区画し、体部は燃糸地文である。

15類（第14図14～16 図版14）

数個の刺突を施した、渦巻ないし管状の突起をもつ土器群。口縁部は厚く肥厚し、數条の沈線がめぐり、頭部に隆線による無文を区画するもの（16）もみられる。体部は不明だが、太い沈線で渦巻・S字文を描く（14・15）と考えられる。

16類（第14図17～20 図版14）

くの字形に外反、あるいは内彌氣味で立上る深鉢で、太い明瞭な沈線で渦巻文を描出し、頸部は隆線で区画する。隆線と渦巻文との接点には、8の字状の浮文を貼付する。それ以外は、全体に沈線及び器形等において、前類に類似する。

17類（第14図21～31 図版14）

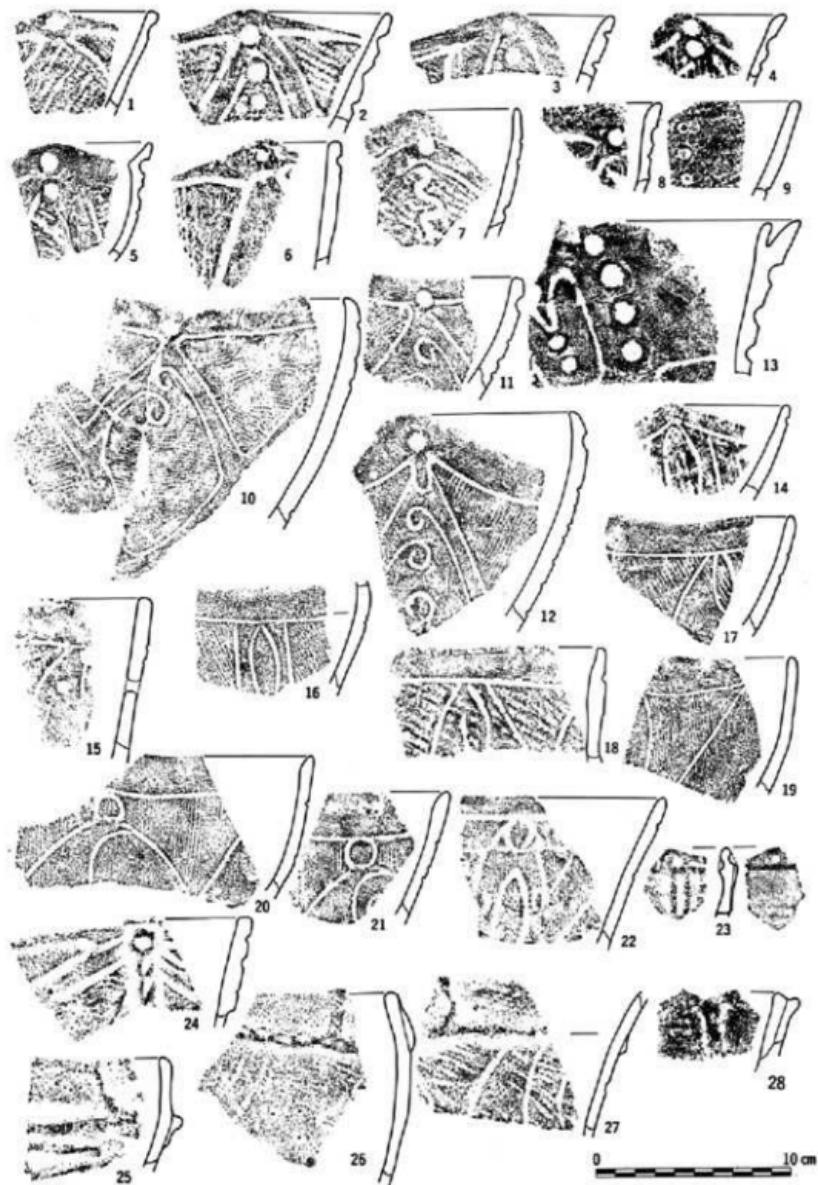
櫛描きないし刷け目文を施す、粗製土器群。直線的に走るもの（23・27・29～31）、縦位及び斜位方向に施すもの（21・22・26）、入組んだ弧状を呈するもの（24・25・28）に分けられ、（28）は一部沈線がみとめられる。口縁部は、無文の隆帯（23）や磨消して無文帯を形成するものが多い。

18類（第15図1～17・19～22 図版14）

燃糸文を施す、粗製深鉢土器群。条の間隔が粗いものや細いもの（11・14・17）、他に網目状を呈するもの（20～22）等がみられ、口縁部を約1cm幅で磨消すもの（6～8・10・11）が多いが、沈線で区画するもの（4・9）もみとめられる。また、体部下半に隆線をめぐらし、底部まで磨消す場合（13・15・16）もある。他に（1・2）は波状口縁の頂点部に刺突を施し、（14）は裏面に斜繩文、（19）は沈線を伴う等の特徴をもつ。

19類（第15図18・23～32 図版14）

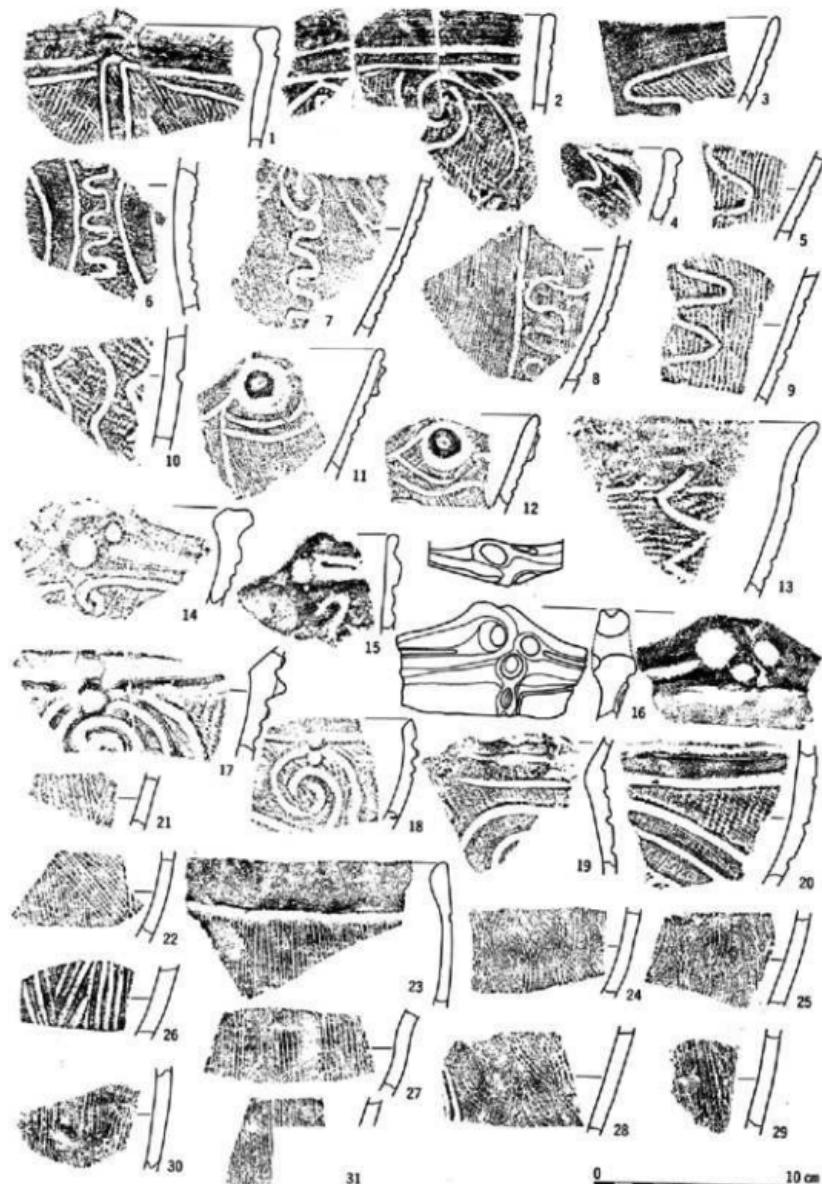
器面に斜繩文を施す、粗製深鉢土器群。量的には、前類の約50%の出土量である。器面全体に斜繩文・羽状繩文（26）・異状繩文（27・31）等を施し、前類同様、口縁部に無文帯を形成するものが多いが、中には沈線で区画するもの（24・25）もみられる。繩文には、結束を斜位・縦位に伴うもの（23・25・29・30）もみとめられる。



8—S T 6 b
15—S K 5
28—S T 2 b

—29—

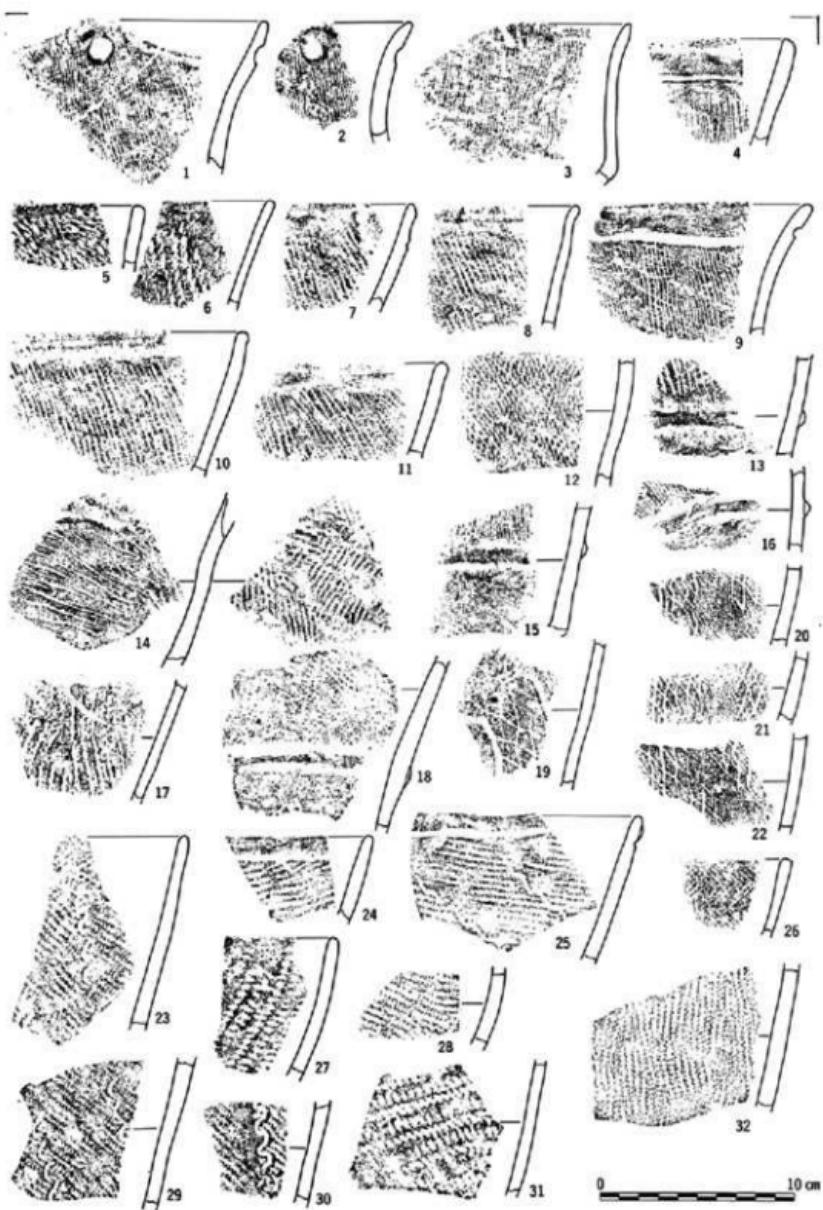
第13図 土器拓影図(4)



1・2—SK 3 覆土 1層
4—SK 14 覆土 1層
29—SK 4 b 覆土 2層

-30-

第14図 土器拓影図(5)



16—SK 4 覆土 2 層
30—SK 3 覆土 1 層

2 完形土器

R P 50 (第16図2 図版11) L-25G南東側に位置し、II層より出土した小形土器である。口径6cm・器高7.6cm・底径3.9cmを測る。口縁部が3単位の山形突起を呈し、突起下部に2条の不整な弧線を施し、口縁部を横走する一条の沈線と連結する。さらに弧線を中心に、左右からのびる沈線が垂下し、体部を3単位に区画する。沈線は、細く・浅い。器面は、両面とも粗い成形で仕上げられ、地文は無文である。4類に含まれる。

R P 53 (第18図 図版10) K-25G北東隅検出の埋設土器、確認面は、IV層上面である。土器は正立して出土し、器面に条の細い燃糸文を施す粗製深鉢で、18類に入る。

R P 54 (第18図 図版10) J-25G北東側、III層上面確認の埋設土器。土器は正立し、18類に入る燃糸地文の粗製深鉢で、底部から体部にかけて約2.5cmの幅で無文帯を呈する。

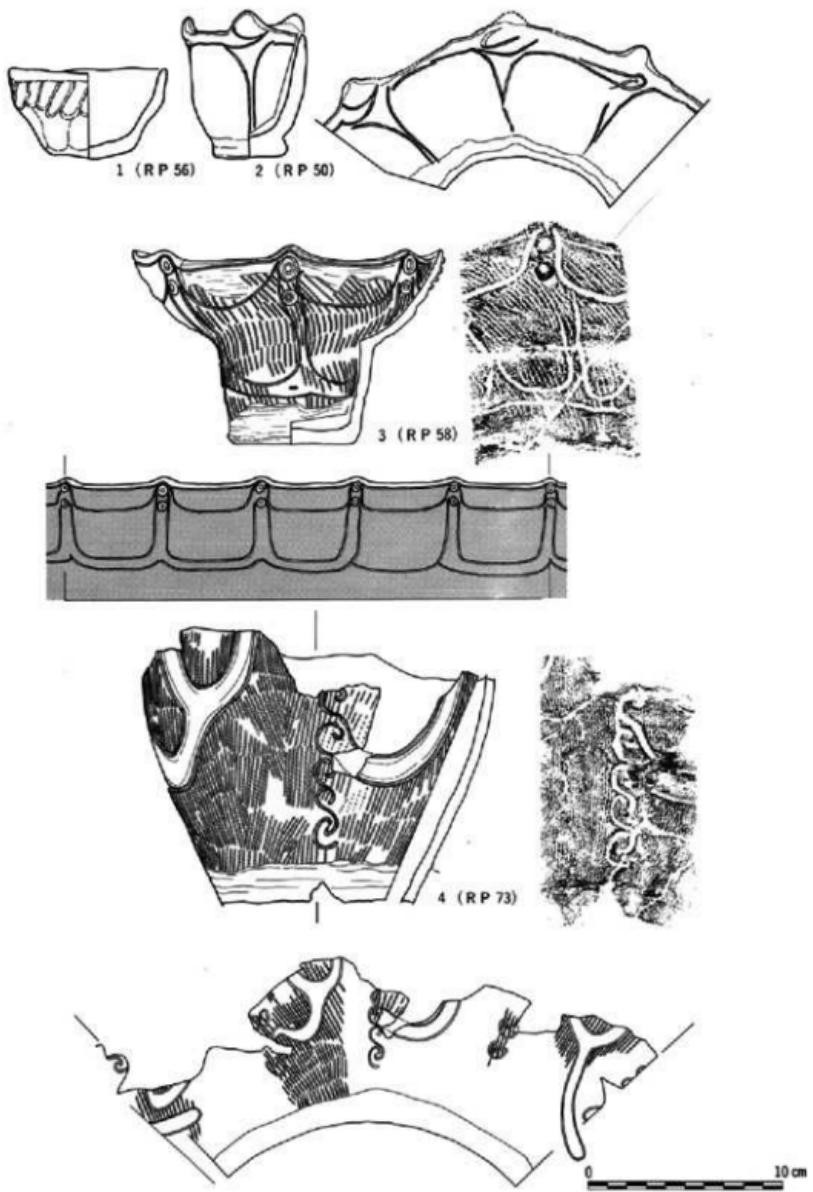
R P 55 (第17図1) S T 2 c 覆土1層から出土し、体部上半で若干彎曲した後口縁部が直立する粗製深鉢である。口縁部は平縁で、粗い調整である。地文はR L斜繩文のみで、斜位方向に施文されており、縦方向に走る条を示す。19類に入る。

R P 56 (第16図1 図版11) S T 2 a 覆土1層出土の手捏の小形土器。口径8cm・器高4cm・底径4.3cmを測る。器面は無文で、体部上半に棒状工具による成形痕を残す。

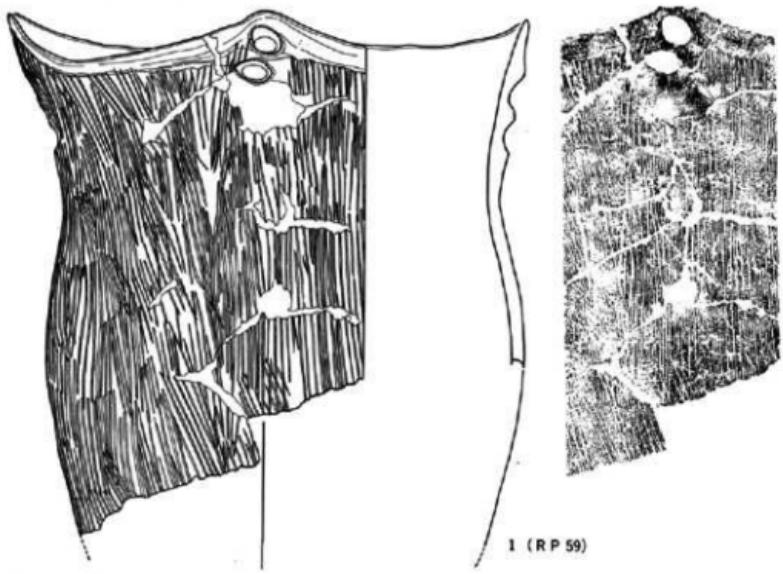
R P 58 (第16図3 図版11) S T 2 a 覆土1層下部から出土した、小形深鉢である。体部下半はコップ状を呈し、上半にかけてくの字形に屈折し、口縁部が大きく開く器形を呈する。口縁部は、山形の小突起が5単位めぐる小波状口縁を呈し、一条の沈線が横走する。突起下には、縦二連の刺突を伴うボタン状浮文を貼付し、横の弧線で連結する。また浮文の左右から垂下する沈線が、体部を5単位に区画する。さらに底部から約2.5cmの高さには、横走する沈線がめぐり、体部下半を区画している。また同沈線下には、粗い磨消しが施される。口径16cm・器高10.2cm・底径6.3cmを測る。8a類に含まれる。

R P 59 (第17図2 図版10・11) J-26G東側・III層上面確認の埋設土器。倒立した状態で出土し、体部下半を欠く。口径27cm・頭部径22.5cm・現存器高27cm・体部最大径24.5cmを測る。器形は体部が内彎し、頭部からゆるやかに外反する粗製深鉢で、口縁部は4単位の波状口縁を呈する。波状下部には、棒状工具による縦二連の刺突が施される。器面全体に櫛描状の刷け目文を斜位及び縦位に施し、口縁下約1cm幅を磨消している。17類。

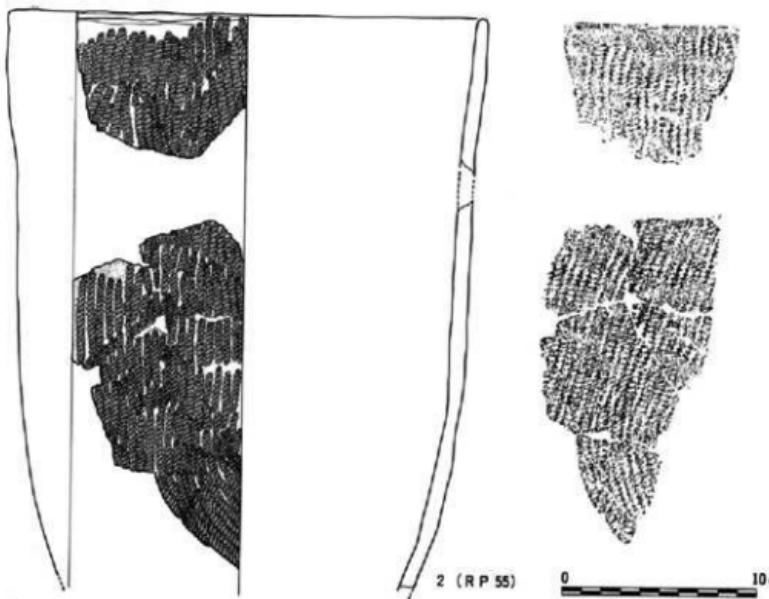
R P 73 (第16図4 図版7・11) S T 6 a 床面出土の炉跡埋設土器である。正立状態で出土し、体部上半・底部を欠く。現存器高14cm・体部最大径17.8cmを測る。器形は、頭部から外反する深鉢と推定される。文様は、沈線間を磨消して渦巻文を描出する。それは、一つおきに垂下する連続S字文・ハート形の沈線文に連結し、同時に4単位に区切られている。地文は、細い燃糸文で、底部にかけて3~4cmは磨消されている。8a類。



第16図 土器実測図(1)

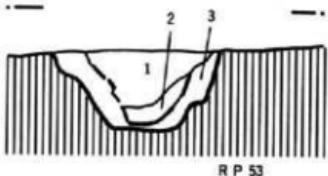


1 (RP 59)

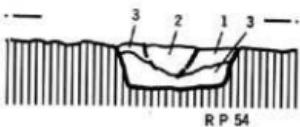


2 (RP 55) 0 10 cm

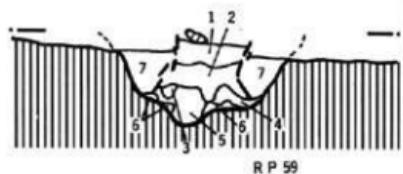
図版 10



- 1 暗褐色土—凹層・炭化物粒子を微量含み、しまっている。
- 2 ニ —凹層を斑状に含み、明るい色調である。
- 3 ニ —凹層を多量に含み、硬くしまっている。



- 1 暗褐色土—砂質で、炭化物を少量含む。
- 2 黒色土—
- 3 暗黄褐色土—炭化物を少量含む。凹石を1点含む。



- 1 黒色土—バサついて、やわらかい。
- 2 暗褐色土—砂質でややしまり、遺物を若干含む。
- 3 暗黄褐色砂質土のブロック。
- 4 ニ (やや暗い色調で、炭化物を含む。)
- 5 ニ (暗い色調で、少量の炭化物を含む。)
- 6 ニ (やや明るい色調で、均質、粒子が細い。)
- 7 暗黄褐色土—黒色度が強く、均質で砂質、炭化物等はほとんど含まない。



第18図 R P 53・54・59 埋設土器土層図



1 (R P 56)



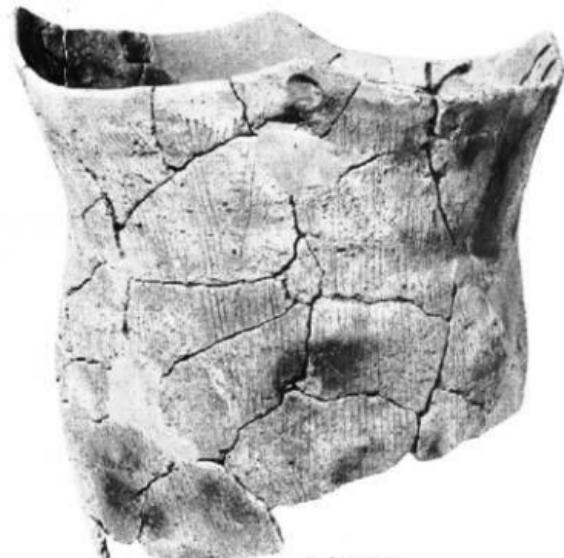
2 (R P 50)



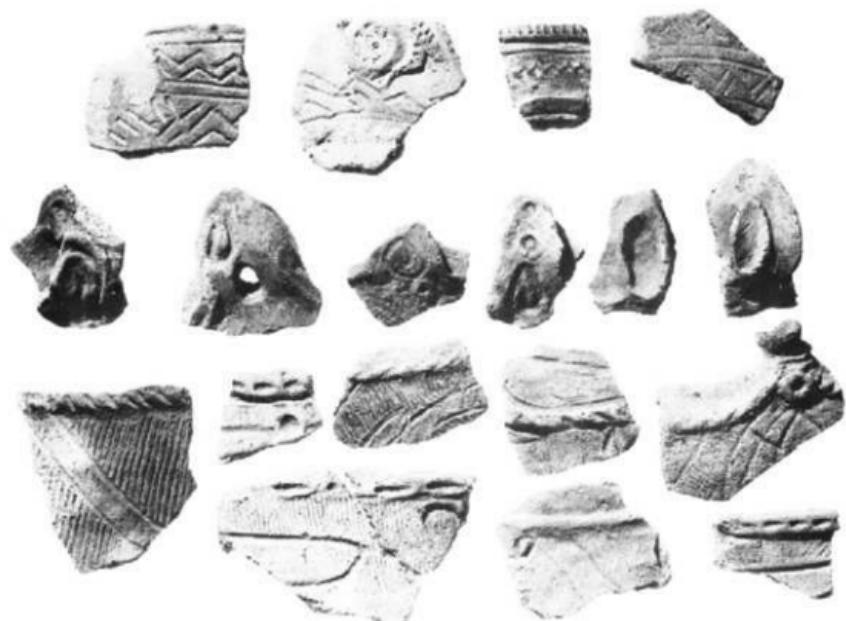
3 (R P 58)



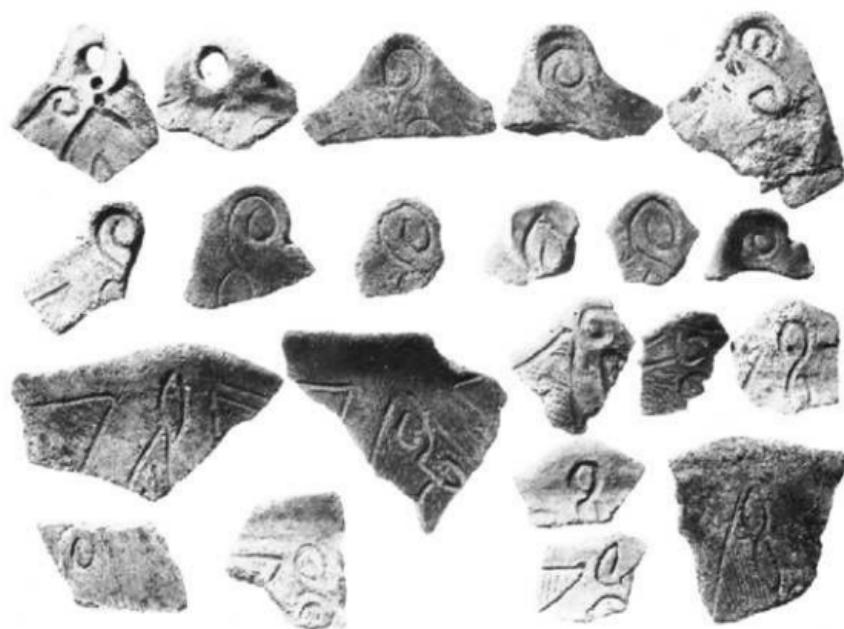
4 (R P 73)



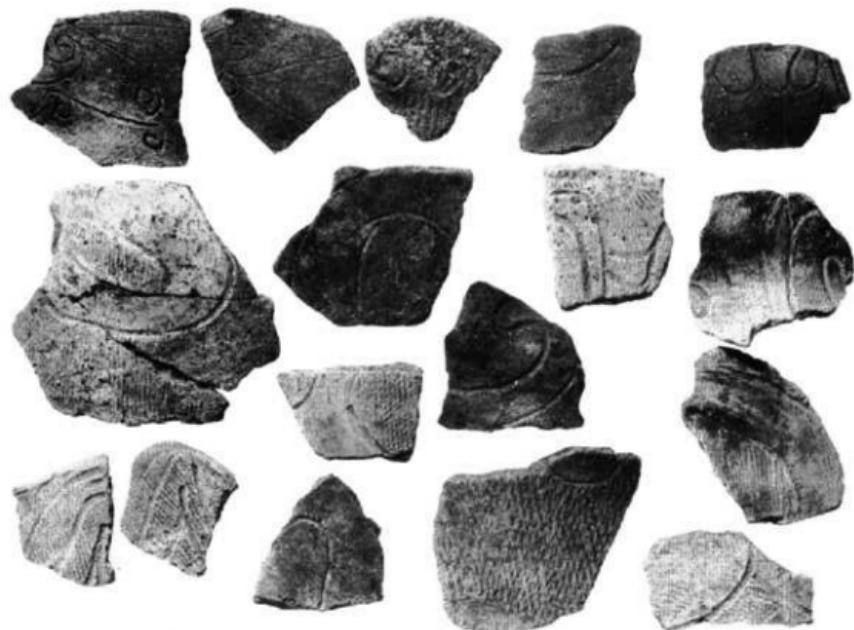
5 (R P 59)



1 ~ 2 陶土器



3 ~ 5 陶土器



6～8 類土器



8～10 類土器



11~15 類土器



16~19 類土器



土偶



滑車形耳飾



3 土製品

土偶 (第19図1 図版15)

N-25Gから出土した、1点のみである。胸部から左肩の部分を残すだけで、他は欠損している。板状を呈し、中心線に沿った穿孔痕が、破損面にみとめられることから、棒状の軸にさし込んで作成ないし祀られたことが推定される。上腕は簡略化されて、肩部から平行に突出した形状を示し、そのために直線的な肩部を呈している。

文様は、背と腹の両面にR L斜縄文を施し、細い沈線で描出される。また部位によって、二つのモチーフに分けられる。胸部から肩部にかけては、二重の同心円を縦位に連ね、左右に三角形に区画を配し、魚眼状のモチーフを描く。一方胸部は、正面が縦位・裏面が斜位方向に沈線を入れ、刷け目状を呈する。

滑車形耳飾 (第19図2～4 図版15)

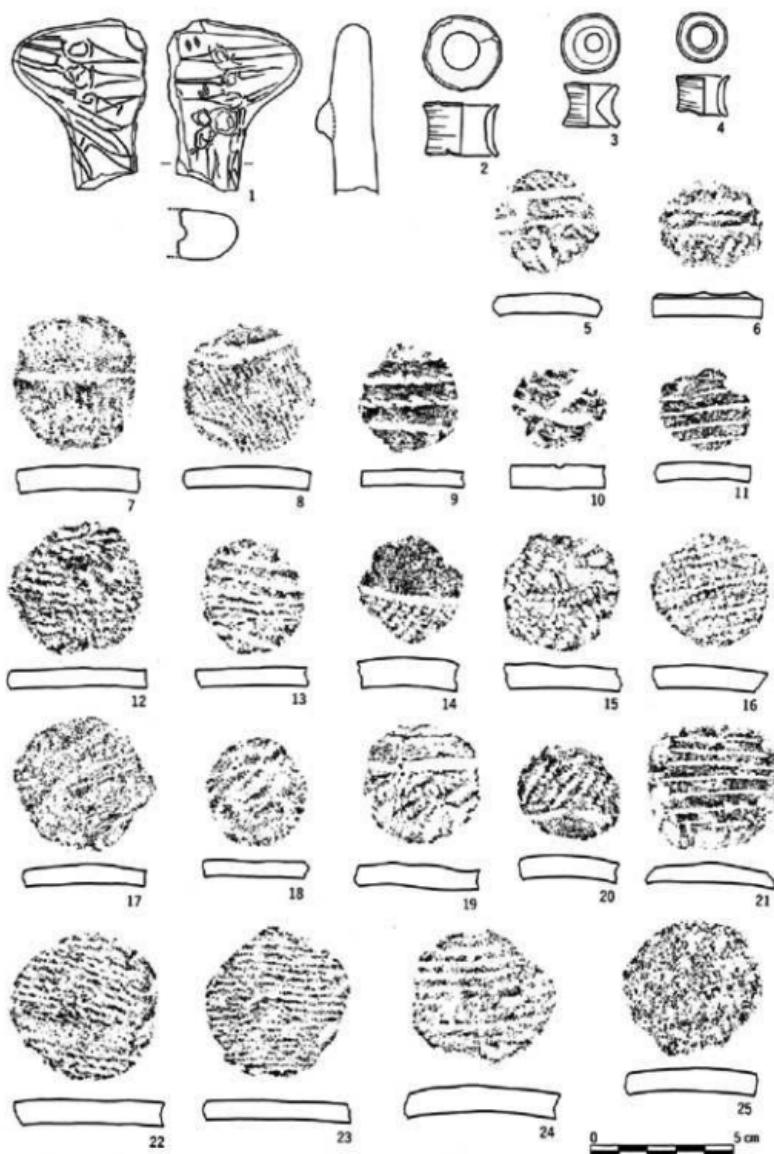
3点出土。いずれもN-25G II層出土である。比較的薄手に仕上げられ、器面は丁寧に研磨され、無文である。また、(3・4)は丹塗りが施されている。大きさは、(3・4)が直径1～2cm、(2)が2.7cmを測る。

円盤形土製品 (第19図5～25 図版15)

総数183点出土。土器破片の側縁部を丁寧に調整して、円形に仕上げている。大きさは、直径3～5cm内外で、大半が土器の体部破片を利用している。底部を利用するものは、ごくわずかである。量的に一番利用されるのは、燃糸文のみの粗製深鉢である。

時期的には、(5～10・14・19・20)等の文様から、縄文後期初頭が多くみとめられる。

円盤形土製品



第19図 土偶・滑車形耳飾・円盤形土製品

4 石器

本遺跡から出土した石器は、打製石器、磨製石器、砾石器、剝片・破片がある。これらの大半は、遺構検出面より上位の第II層中、および遺構の覆土内から検出されたもので、S T 6周辺、土壌群のあるK～M-25Gに集中してみられた。時期的には、前期～中期のものが若干まぎれ込む可能性があるものの、大方は共伴した土器（後期初頭宮戸I b式並行）と同時期と考えて大過ない。以下では、石器の形態・技術的特徴から分類し、それぞれ代表的な器種・型態（タイプ）について概述する。なお、石器総数は232点で、剝片・碎片の総重量は、2,745gである。器種別組成の割合・出土点数は、表-1に示す通りで、凹石、スクレーバー、石鎌、石錐、擦り石、石製円盤、磨斧、石皿、石錘、石匙の順となる。

打製石器は、石鎌・石錐・石匙・スクレーバー（搔・削器）の4器種に大別でき、さらに形態・技術的特徴から細分できる。石鎌は、形態的特徴から1～9の類型が認められ、各類型の出土数は、欠損等で類別不能な2点を除き各々、13、10、3、1、1、2、2、4、1点である。これらは、6を除き無茎で、1～2は脚部が中程で張り出し、内湾する特徴的な形態を持つ。7～9は全体に厚く形も不整である。加工では、4が半両面加工であるほかは両面加工である。石錐は、つまみの有無、尖頭部の作り出し、機能部の断面等から10～15の6類に分類できる。量的には13、11が多く、他は2～3点づつである。15は、無茎の石鎌に似るが、全体に丸味がある。石匙は、所謂縦形で、先端に搔器様の加工がみられる。スクレーバー（搔・削器）は、石器総数の約1/4を占む組成の主体的なもので、技術的特徴から10類に細分できる。このうち、27・28は、小形の盤状剝片を利用して、腹面の先端に角度の小さな二次加工を施すもので、タイプとしてのまとまりをもつ。29は、縦長剝片の先端と基部を切断して整形し、その後一側縁にやや急角度の二次加工を施すものである。21は、縦長剝片の一側縁に抉りのあるノッチドスクレーバーである。その他、両面加工で、所謂窓状石器の形態を持つもの（30）や、小形で不整台形状を呈すものが若干みられた。

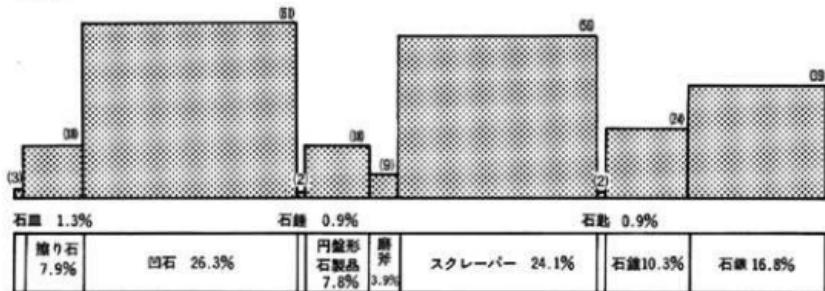
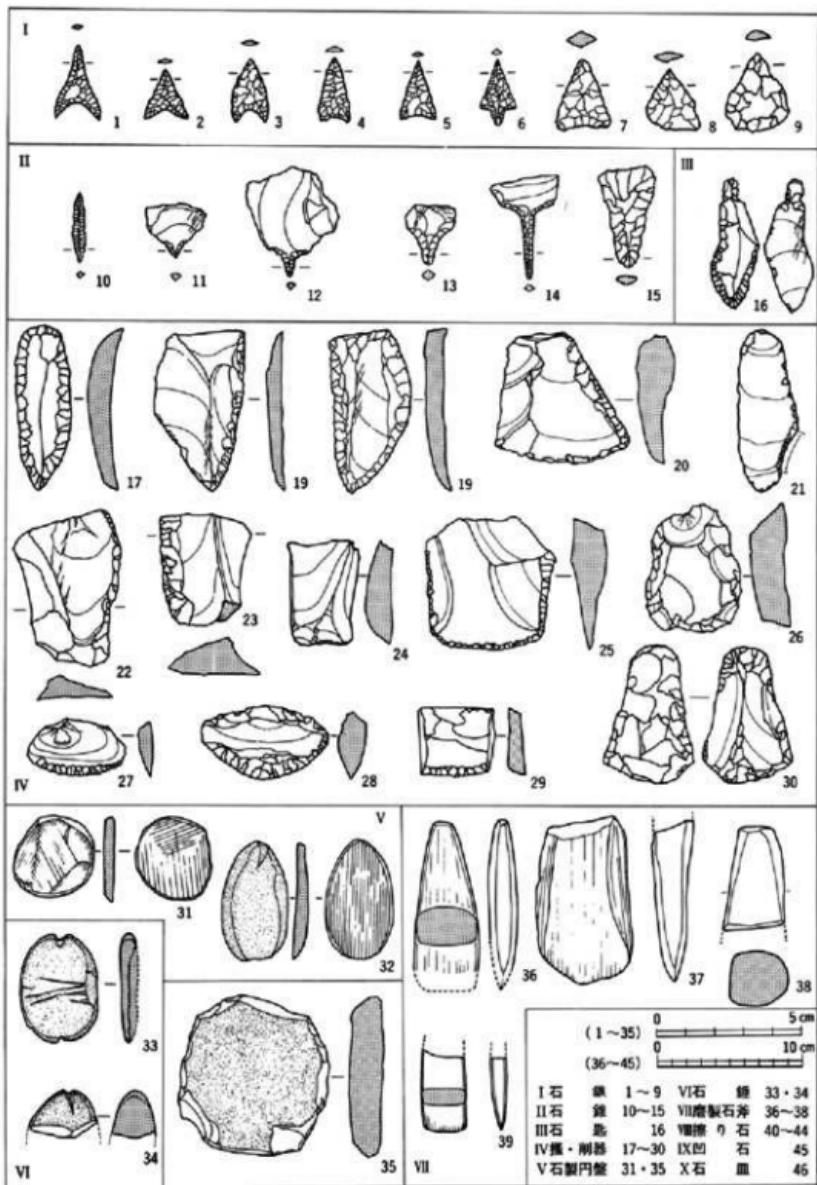
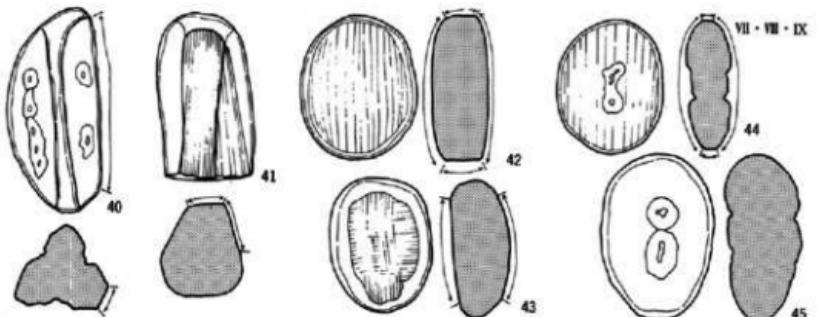


表-1 石器組成と出土数



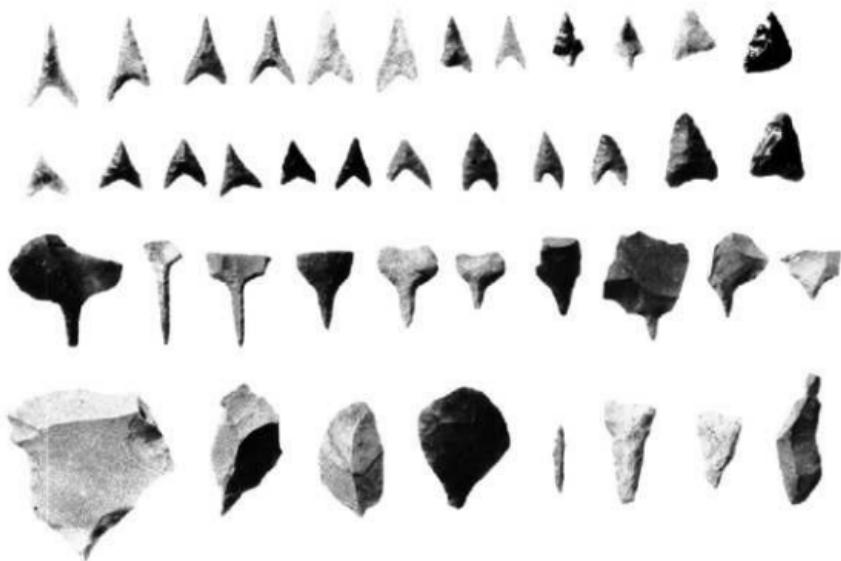
第20図 石器分類図(1)



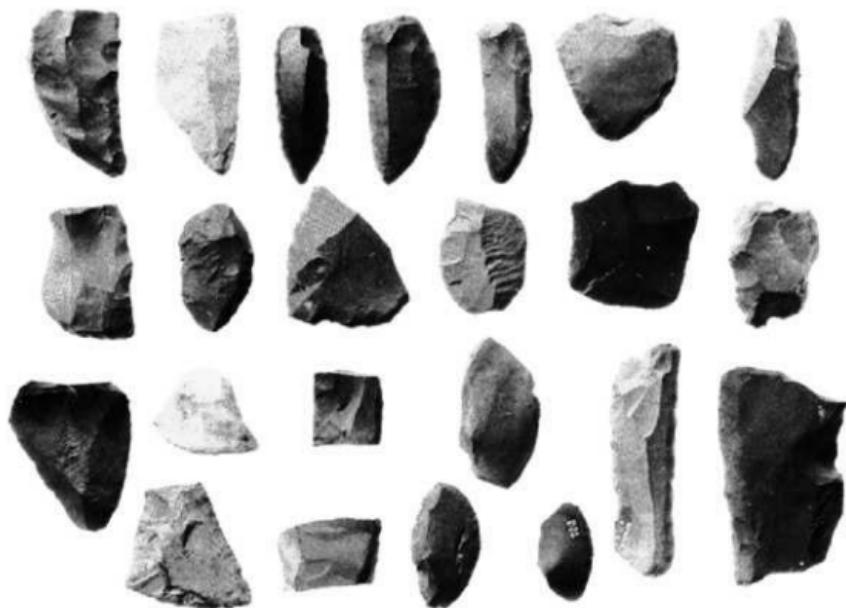
磨製石器は、石斧・擦り石の2器種に大別でき、形態的特徴から細分できる。石斧は、基部や刃部の形態および断面形から36～39の4類に分類でき、そのうち36のカマボコ状の断面を持つものが主体をなす。擦り石は、円形や橢円形を呈する自然砾を素材とするもので表裏面、側辺に擦り面を持つ。これらは、形態的特徴と擦り面の位置から4類に細分できる。40、44は、凹石と兼用ないし凹石から転用されたもので、各々タイプを異にしている。41は、主として狭い一側縁を擦り面とするもので、一部右側面にも擦り面を持つ。42は、表裏の両面および側面全周に擦り面を持ち、43は、表裏の両面にのみ擦り面がある。43には、不整な擦り傷痕が付いている。

その他の石製品・砾石器では、円盤形石製品（31・35）、石錐（33・34）、石皿（46）、凹石（45）がある。円盤形石製品は、製作技法から打製と磨製の2種があり、量的には扁平砾の側縁を粗く打ち欠いて円盤状にする打製のものが多く、磨製のものは少ない。32は、裏面と側辺の一部に擦り面を持つもので、31の未製品と考えられる。打製円盤は、直径が4～5cmで、磨製円盤は、2.5～3.5cmとやや小形である。石錐は、橢円形の長径3～4cmの自然砾を素材とするもので、上下端にそれぞれ鋭い刻目が入る。石皿は、多孔質の砾を素材とするもので、長方形に整形し、皿状の返し部を持つ。中心がやくぼみ、裏底面に半欠のため不明ながら4個の脚を持つ。凹石は、本遺跡出土石器の中で最も多く、61点の出土数がある。円形、橢円形の砾を素材とし、凹を1～3個、片面あるいは両面に持っている。

第21図 石器分類図(2)



石核・石鏽・石器



標・削器

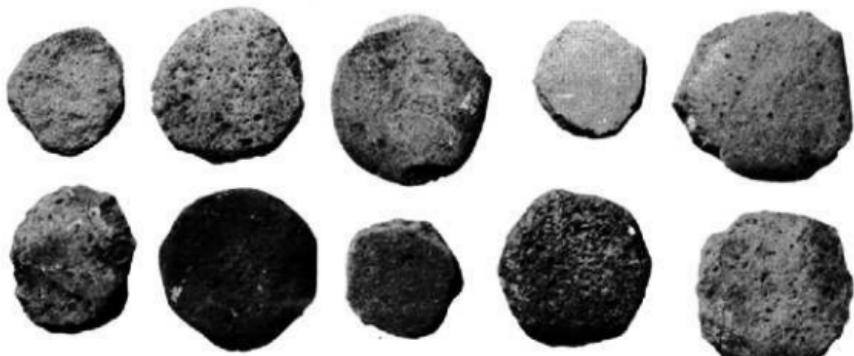


周製石斧



凹石

丹霞形石製品・石錐



円盤形石製器



石皿

焼り石

表-2

石器分類基準表

I 石鏃

1 脚部が中程から張り出して内側に、すぐりの強い形態。

2 脚部が中程から張り出して内側に、やや小形、すぐりの弱い形態。

3 間がゆるく内側し、すぐりがやや強い。

4 角度の急な二等辺三角形で、めぐらしがやや強い。

5 二等辺三角形で、めぐらしが弱つ。

6 有茎で、めぐらしが弱つ。

7 二等辺三角形で、めぐらしが弱つが全体に弱い。

8 穀が不整で全体に弱い。

9 前邊が尖端を持ち全体に弱い。加工も粗雑である。

II 石鏟

10 断面菱形で、棒状の形態のもの。

11 断面三角形で、つまみ頭が明らかに出した断面形を持つ。

12 断面三角形で、つまみ頭が明らかに出した断面形を持つ。

13 断面菱形で、やや太い断面部が突出する。

14 断面菱形の断面形が最もよく突き出しつまみを持つ。

15 断面菱形状で、石縫は粗朶、全体に丸く厚い。

III 石鎌

16 いわゆる象形石鎌で、両側縁を加工し先端を尖頭にする。

17 長角片の全周を加工し、上端を大きく、下端を尖頭にするもの。

18・20 主に1側縁を加工し、先端が尖頭になるもの。

19 長角片の両側縁を加工し、先端が尖頭部になるもの。

21 長角片の片側縁にめぐらしの入るもの。(ノッチドスレーパー)

22・23 不定期片の一側縁に加工を施すもの。

24 不定期・長角片の先端に加工を施すもの。

25・26 両側縁と先端部の三端に加工を施すもの。

27・28 小さな貝殻状剥片の腹面先端部に加工を施すもの。

29 剣の基部・先端部を切削して彫影し、1側縁に加工を施すもの。片面加工(2点)

30 バチ状の形態を持ち、上端に急角度の加工を施すもの。

31 断面および全面を鋸歯にして長い円盤状にするもので小形。

32 断面および全面を鋸歯して薄い円盤状にするもので、31等の未製品と考られるもの。

33 断面の長径を自く打ち次いで円盤状にするもので、やや大型。

34 断面で扁平な自然の長径の両端をV字状に削むもの。

35 断面の長径を自くV字状に削むもの。

36 断面がせまく丸錐を持ち、刃部が平坦で足角的なもの。断面形は楕が丸く中央でやや厚くなるカマボコ形状とするもの。

37 形態が不定で、断面形は楕が丸い不整台形状を呈するもの。

38 面取りが不整で、断面形は楕の方向に近い。

39 基部、刃部とも平坦で、足角をなす。断面形は、面取りが繊著なため、脚の角線を異方形に近い。

40 断面三角形の長辺円錐を用ひ、器の三面に凹窓、一側面に鋸り面を持つ。

41 長辺円錐の端のせまい一部に鋸り面をもつもの。

42 片面加工の表面、および端面に鋸り面をもつもの。

43 片面加工の表面に鋸り面をもつもの。

44 断面が扁平な楕の表面間に凹窓を持ち、表面および全周に鋸り面を持つ。

45 圆・棒・長辺円錐の1～3面に凹窓を持ち、凹窓を各面に0～3個持つもの。

46 多孔質の器を長辺方に彫影し、圓柱に上げるもので中央部に凹窓を持つ。底面には4個の窓がつく。3点の出土品があるが、いずれも火焔器である。

V 素形石製品

1 断面および全面を鋸歯にして長い円盤状にするもので小形。

2 断面および全面を鋸歯して薄い円盤状にするもので、31等の未製品と考られるもの。

3 断面の長径を自くV字状に削むもの。

4 断面でやや厚い自然の長径の両端をV字状に削むもの。

5 断面がせまく丸錐を持ち、刃部が平坦で足角的なもの。断面形は楕が丸く中央でやや厚くなるカマボコ形状とするもの。

6 断面が不整で、断面形は楕の丸い不整台形状を呈するもの。

7 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

8 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

9 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

10 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

11 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

12 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

13 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

14 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

15 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

16 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

17 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

18 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

19 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

VI 石鎚

1 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

2 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

3 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

4 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

5 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

6 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

7 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

8 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

9 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

10 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

11 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

12 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

13 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

14 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

15 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

16 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

17 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

18 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

19 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

VII 磨石

1 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

2 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

3 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

4 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

5 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

6 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

7 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

8 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

9 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

10 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

11 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

12 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

13 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

14 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

15 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

16 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

17 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

18 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

19 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

VIII 磨石片

1 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

2 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

3 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

4 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

5 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

6 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

7 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

8 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

9 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

10 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

11 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

12 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

13 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

14 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

15 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

16 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

17 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

18 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

19 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

X 四石

1 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

2 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

3 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

4 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

5 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

6 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

7 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

8 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

9 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

10 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

11 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

12 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

13 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

14 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

15 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

16 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

17 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

18 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

19 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

XI 石刀

1 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

2 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

3 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

4 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

5 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

6 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

7 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

8 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

9 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

10 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

11 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

12 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

13 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

14 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

15 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

16 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

17 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

18 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

19 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

XII 石斧

1 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

2 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

3 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

4 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

5 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

6 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

7 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

8 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

9 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

10 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

11 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

12 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

13 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

14 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

15 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

16 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

17 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

18 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

19 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

XIII 石刀

1 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

2 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

3 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

4 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

5 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

6 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

7 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

8 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

9 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

10 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

11 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

12 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

13 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

14 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

15 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

16 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

17 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

18 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

19 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

XIV 石刀

1 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

2 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

3 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

4 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

5 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

6 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

7 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

8 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

9 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

10 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

11 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

12 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

13 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

14 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

15 断面がV字状で、断面形は楕の方向に近い。

V まとめ

今回の調査は、新庄北高等学校向町分校の新校舎建設工事にかかる緊急発掘調査である。調査は、昭和55年4月14日～同年6月20日までの実質40日間実施され、その結果は次のようにまとめられる。

1 遺構

遺構は、主として調査区北東側のI～N-25Gに集中し、住居跡9軒・土塙32基を検出した。住居跡は、それぞれ重複しており2・6号の2か所にまとまっている。時期的には、覆土及び床面からの出土土器により2c・d号が縄文前期末大木6式、2a・b、6a～e号が縄文後期初頭宮戸I b式併行に分けられる。構造については、前者が隅丸方形のプランに主柱穴（推定）を配し、地床炉を伴う。後者が不整楕円形・方形のプランに壁柱穴をめぐらし、炉跡は地床炉である。また6a号では扁平な河原石を立て、側に埋甕炉と考えられる埋設土器（RP73）が検出され、時期的な特徴のひとつを示している。

各住居跡の新旧関係は、その切り合いから2a→2b→2c→2d、6a→6b、6a→6c→6d→6eと考えられる。

2 遺物

土器については、文様技法及び文様別から1～19類に分類した。時期的には、縄文前期末・後期初頭・晩期前半（註1）に分けられる。

第1群土器 縄文時代前期末の土器群。

1類 口縁部の渦巻状の隆線、山形状に貼付された紐状の隆線、半截竹管による山形沈線文を特徴とする。大木6式に併行する。

第2群土器 縄文後期初頭の土器群。

2～16類 山形状突起及び波状口縁を特徴とし隆線及び鎖状隆線、S字文、連鎖S字文、渦巻・三角形・倒卵形のモチーフを描く撚糸地文の磨消縄文が盛行するグループである。特に2・3類にみられる口縁部形態及び鎖状隆線・S字文等は、門前式からの特色がうかがえる。

本群の土器は、県内においては比較的出土例が少なく、類例としては神矢田遺跡第3群土器があげられる。

第3群土器 地文のみの粗製土器群。

17～19類 刷け目文・撚糸文・斜繩文がみられ、量的には撚糸文をもつのが圧倒的に多い。器形は深鉢が主体を占め、口縁部を磨り消して無文帶を施す特色がみとめられる。他

には、口縁部に刺突文を施したり、体部下半を隆線で区画するものなどがある。

時期的には、縄文後期初頭が大半であるが、17類（24・25・28）は一部の破片にみとめられる沈線の特徴から縄文中期大木9式に併行すると考えられる。

石器については、器種別に石鏃38・石錐22・石匙1・スクレーパー56・石錘2・磨製石斧7・凹石63・擦り石18・石皿3・円盤形石製品16の出土がみられる。

時期的には、共伴した土器からみて縄文後期初頭宮戸I b式に大半が併行すると思われる。特に石鏃の中で、脚部が中程から張り出して内彎し、えぐりをもつ形態は、門前貝塚・桙山遺跡等に類例があり、縄文後期初頭の特色として位置づけられる。

打製石器と磨製石器との出土比率は、約5.6:4.4でありほぼ半々の出土数といえる。中でも石匙が1点と少なく、かわりにスクレーパーが出土総数の約1/4を占める程出土していることは、両者の間に機能的な類似性があることを推定し得る。それから出土量が最も多い凹石の中には、擦り石を二次利用したものもみとめられる。

註1 第1次調査で調査区南東側から、縄文晩期（大洞BC～C₂式併行）の遺物が多量に出土している。同報告書で詳細に分類されているので、本書では割愛した。

参考文献

- ① 吉田義昭 「門前貝塚」（郷土資料館報告） 1958年
- ② 柏倉亮吉他 「山形県史 資料篇II」 山形県史編纂委員会 1969年
- ③ 北上市教育委員会 「北上市稻瀬町桙山遺跡緊急調査報告」 1969年
- ④ 遊佐町教育委員会 「神矢田遺跡—第3・4・5次発掘調査報告と考察」 1972年
- ⑤ 山形県教育委員会 「山形県遺跡地図」 1978年
- ⑥ 山形県教育委員会 「水上遺跡発掘調査報告」 山形県埋蔵文化財調査報告書第27集 1980年

* 裏表紙のマークは昭和41年5月に定められた「文化財愛護のシンボルマーク」です。このシンボルマークは、ひろげた両方の手のひらのパターンによって、日本建築の重要な要素である斗拱(組みもの)のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財という民族の遺産を過去、現在、未来にわたり永遠に伝承していくという愛護精神を象徴したものです。

山形県埋蔵文化財調査報告書第40集

みず かみ
水 上 遺 跡

第2次発掘調査報告書

昭和56年3月25日 印刷

昭和56年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 神大風印刷

